

# 日和下駄

一名 東京散策記

永井荷風

青空文庫



## 序

東京市中散歩の記事を集めて『日和下駄』と題す。そのいはれ本文のはじめに述べ置きたれば改めてここには言はず。『日和下駄』は大正三年夏のはじめころよりおよそ一歳あまり、月々雑誌『三田文学』に連載したりしを、この度米刃堂主人のもとめにより改竄かいざんして一巻とはなせしなり。ここにかく起稿の年月を明あきらにしたるはこの書板成りはんて世に出づる頃には、篇中記する所の市内の勝景にして、既に破壊せられて跡方もなきところ尠すくなからざらん事を思へばなり。見ずや木造の今戸橋いまどぼしは蚤はやくも変じて鉄の釣橋と

なり、江戸川の岸はせめんとにかためられて再び露草の花を見  
ず。さくらだごもんそと 桜田御門外 むこうあきち また芝羽橋向の閑地には土木の工事今まさに  
おこ 興らんとするにあらずや。昨日の淵ふち今日の瀬となる夢の世の形見  
を伝へて、つたな拙きこの小著、幸に後の日のかたり草の種ともならば  
なれかし。

乙卯いっぽうの年晩秋

荷風小史

## 第一 日和下駄

人並はずれて丈せいが高い上にわたしはいつも日和下駄ひよりげたをはき蝙蝠傘こうもを持って歩く。いかに好よく晴れた日でも日和下駄に蝙蝠傘りがさでなければ安心がならぬ。これは年中湿気しっけの多い東京の天気に対して全然信用を置かぬからである。変りやすいは男心に秋の空、それにお上かみの御政事おせいじとばかり極きまつたものではない。春の花見頃午ひるまえ前の晴天は午後ひるすぎの二時三時頃からきまつて風にならねば夕方から雨になる。梅雨つゆの中うちは申すに及ばず。土用どように入いればいついかなる時驟雨しゅうう沛然はいぜんとして来きたらぬとも計はかりがたい。尤もこの変り

やすい空模様思いがけない雨なるものは昔の小説に出て来る才子  
佳人わりが割わりなき契ちぎりを結ぶよすがとなり、また今の世にも芝居のハネ  
から急に降出す雨を幸いそのまま人目をつつむ幌ほろの中うち、しつぽり  
何処どこぞで濡れの場を演ずるものまたなきにしもあるまい。閑話それはさ  
休題ておき日和下駄の效能といわば何ぞそれ不意の雨のみに限らんや。  
天気つづきの冬の日といえども山の手一面赤土を捏こねかえ返す霜解しもどけ  
も何のその。アスワルト敷きつめた銀座日本橋の大おおどおり通、や  
たらに溝どぶの水を撒まきちらす泥濘ぬかるみとて一向驚くには及ぶまい。

わたし  
私はかくの如く日和下駄をはき蝙蝠傘を持って歩く。

うち  
市しちゆう中の散歩は子供の時から好きであった。十三、四の頃私の  
家は一時小石川こいしかわから麴町こうじまち永田町ながたちようの官舎へ引移ひきうつった事が

あつた。勿論電車のない時分である。私は神田錦町の私立  
 英語学校へ通つていたので、半蔵御門を這入つて吹上御苑  
 の裏手なる老松鬱々たる代官町の通をばやがて片側に二  
 の丸三の丸の高い石垣と深い堀とを望みながら竹橋を渡つて平  
 川口の御城門を向うに昔の御搗屋今の文部省に沿うて一ツ橋  
 へ出る。この道程もさほど遠いとも思わず初めの中は物珍し  
 のでかえつて楽しかった。宮内省裏門の筋向なる兵營に沿  
 うた土手の中腹に大きな榎があつた。その頃その木蔭なる土手下  
 の路傍に井戸があつて夏冬ともに甘酒大福餅稲荷鮓飴湯  
 なんぞ売るものがめいめい荷を卸して往来の人の休むのを待つて  
 いた。車力や馬方が多い時には五人も六人も休んで飯をくつ

ている事もあつた。これは竹橋の方から這入つて来ると御城内ごじょうない代官町の通は歩くものにはそれほどに気がつかないが車を曳ひくものには限りも知れぬ長い坂になつていて、丁度この辺へんがその中途に当つているからである。東京の地勢はかくの如く漸次ぜんじに麴町四よ谷つやの方へと高くなつているのである。夏の炎天には私も学校の帰かえりみち途 井戸の水で車力や馬方と共に手てぬぐい拭いを絞つて汗を拭き、土手の上に登つて大榎の木蔭に休んだ。土手にはその時分から既に「昇ルベカラズ」の立札たてふだが付物つきものになつていたが構わず登れば堀を隔てて遠く町が見える。かくの如き眺望は敢あえてここのみならず、外濠そとぼりの松蔭まつかげから牛込うしごめ小石川の高台を望むと同じく先ず東京中ちゆうでの絶景であろう。



私は錦町からの帰途桜田御門さくらだごもんの方へ廻つたり九段くだんの方へ出たりいろいろ遠廻りをして目新しい町を通つて見るのが面白くてならなかつた。しかし一年ばかりの後途中のちの光景にも少し飽あきて来た頃私の家は再び小石川の旧宅たちもどに立戻たちもどる事になつた。その夏始したまちめて両りようごく国すいれんばの水練場へ通いだったので、今度は繁華ししたまちの下町ししたまちとおおかわすじと大川筋との光景ひとかたに一方きようならぬ興きようを催もよほすこととなつた。

今こんにち日東京市中の散歩は私の身みに取つては生れてから今日に至る過去の生涯にちにちに対する追憶たどの道みちを辿たどるに外ほかならない。これに加くわるに日々昔ながらの名所古蹟はきやくを破やぶ却かへして行く時勢ときせいの変遷へんせんは市中の散歩に無常悲哀むじやうひがいの寂さびしい詩趣しすうを帯おびびさせる。およそ近世きんせいの文学ぶんがくに現れた荒廢あらいの詩情しじやうを味あじわおうとしたら埃エジプト及伊太利イタリーに赴おもむかずと

も現在の東京を歩むほど無残にも傷ましい思をさせる処はあるまい。今日見て過ぎた寺の門、昨日休んだ路傍の大樹もこの次再び来る時には必貸家か製造場になつてゐるに違ひないと思えば、それほど由緒のない建築もまたはそれほど年経ぬ樹木とても何とはなく奥床しくまた悲しく打仰がれるのである。

一体江戸名所には昔からそれほど誇るに足るべき風景も建築もある訳ではない。既に宝晋齋其角が『類柑子』にも「隅田川絶えず名に流れたれど加茂桂よりは賤しくして肩落したり。山並もあらばと願はし。目黒は物ふり山坂おもしろけれど果てしなくて水遠し、嵯峨に似てさみしからぬ風情なり。王子は宇治の柴舟のしばし目を流すべき島山もなく護国寺は吉野に似て

ひとめ 一目千本の雪の曙思ひやらるゝにや爰も流なくて口惜し。住吉  
あけぼの  
うつしまつ を移 奉る 佃 島 も岸の姫松の少きに反橋のたゆみをかし  
つくだしま  
さいふ からず宰府は崇め奉る名のみにして染川の色に合羽ほしわたし  
あがたてまつ  
おもいかわ 思 河 のよるべに芥を埋む。都府楼観音寺唐絵と云はんに四ツ  
あくたうず  
ほうおんじ 目の鐘の裸なる、報恩寺の薨の白地なるぞ屏風立てしやうな  
いらかしらし  
こだち り。木立薄く梅紅葉せず、三月の末藤にすがりて回廊に筵を設  
うめもみじ  
うんぬん くるばかり野には心もとまらず……云々。「そして其角は江戸  
むきず 名所の中唯ひとつ無疵の名作は快晴の富士ばかりだとなした。こ  
うち れ恐らくは江戸の風景に対する最も公平なる批評であろう。江戸  
 の風景堂宇には一として京都奈良に及ぶべきものはない。それに  
 もかかわらずこの都会の風景はこの都会に生れたるものに対して

必ず特別の興趣を催させた。それは昔から江戸名所に関する案内記狂歌集絵本の類たぐいおびただの夥しゆつぱんしく出板しゆつぱんされたのを見ても容易に推量する事が出来る。太平の世の武士町人は物見遊山ものみゆさんを好んだ。花を愛し、風景を眺め、古蹟を訪とう事は即ち風流な最も上品な嗜たしなみとして尊ばれていたもので、実際にはそれほどの興味を持たないものも、時にはこれを銜てらつたに相違ない。江戸の人が最も盛に江戸名所を尋ね歩いたのは私の見る処やはり狂歌全盛の天明てんめい以後であつたらしい。江戸名所に興味を持つには是非とも江戸軽文学の素養がなくてはならぬ。一步を進むれば戯作者げさくしゃ氣質かたぎでなければならぬ。

この頃ごろ私が日和下駄をカラカラ鳴ならして再び市しちゆう中の散歩を試み

初めたのは無論江戸軽文学の感化である事を拒まない。しかし私の趣味の中には自らまた近世チレットタンチズムの影響も混つていよう。千九百五年パリのアンドレエ・アレエという一新聞記者が社会百般の現象をば芝居でも見る気になつてこれを見物して歩いた記事と、また仏国各州の都市古蹟を歩廻つた印象記とを合せてEn《アン》Flanant《フラアナン》と題するものを公にした。

その時アンリイ・ボルドオという批評家がこれを機会としてチレットタンチズムの何たるかを解剖批判した事があつた。茲にそれを紹介する必要はない。私は唯西洋にも市内の散歩を試み、近世的世相と並んで過去の遺物に興味を持った同じような傾向の人がいた事を断つて置けばよいのである。アレエは西洋人の事故その

態度は無論私ほど社会に対して無関心でもなくまた肥遯的ひとんてきでもない。これはその本国の事情が異つてゐるからであらう。彼は別に為すべき仕事がないからやむをえず散歩したのではない。自らみずか進んで観察しようと企てたのだくわだ。しかるに私は別にこれといつてなすべき義務も責任も何にもないいわば隠居同様の身の上である。その日その日を送るになりたけ世間へ顔を出さず金を使わず相手を要せず自分一人で勝手に呑氣のんきにくらす方法をと色々考案した結果のツが市中のぶらぶら歩きとなつたのである。

フランスフランスの小説を読むと零落おちぶれた貴族いえの家に生れたものが、僅少わずかの遺産に自分の身だけはどうかやらこうやら日常の衣食には事欠かぬ代り、浮世たのしみの樂よそを余所に人ひとまじわ交りもできず、一生涯を果敢はかな

く淋しく無為無能に送るさまを描いたものが沢山ある。こういう人たちは何か世間に名をなすような専門の研究をして見たいにもそれだけの資力がなし職業を求めて働きたいにも働く口がない。せん方なく素人画しろうとえをかいたり釣つりをしたり墓地を歩いたりしてなりたけ金のいらぬようなその日の送方おくりかたを考えている。私の境遇はそれとは全く違う。しかしその行為とその感慨とはやや同じであろう。日本の現在にほんは文化の爛熟してしまった西洋大陸の社会とはちがつて資本の有無うむにかかわらず自分さえやる気になれば為すべき事業は沢山ある。男女烏合うごうの徒とを集めて芝居をしてさえもし芸術のためというような名前を付けさえすればそれ相応かに看み客きやくが来る。田舎の中学生の虚栄心を誘さそ出して投書を募つれば

文学雑誌の経営もまた容易である。慈善と教育との美名の下に弱  
 い家業の芸人をおどしつけて安く出演させ、切符の押売りで興行  
 をすれば濡手ぬれてで粟あわの大儲おおもうけも出来る。富豪の人身攻撃から段々  
 に強面こわもての名前を売り出し懐中ふところの暖くなつた汐時しおどきを見計みはからつ  
 て妙に紳士らしく上品に構えれば、やがて国会議員にもなれる世  
 の中。現在の日本ほど為すべき事の多くしてしかも容易な国は恐  
 らくあるまい。しかしそういう風な世渡りいさぎよを潔しとしないものは  
 宜よろしく自ら讓しりぞつて退ほかくより外ほかはない。市中の電車に乗つて行先ゆくさき  
 を急のりかえごうというには乗換場のりかえばを過すぎる度たびごとに見得みえも体裁ていさいもかま  
 わず人を突き退のけ我武者羅がむしやらに飛乗ばんゆうる蛮勇ばんゆうがなくてはならぬ。自  
 らその蛮勇なしと省かえりみたならば徒いたずらに空いた電車を待つよりも、泥ど



龜ろがめの歩み遅々ちぢぢたれども、自動車の通らない横よこちよう町まちあるいは市  
 区改正の破壊まぬかを免れた旧道をてくてくと歩くに如しくはない。市中  
 の道を行くには必かならずしも市設の電車に乗らねばならぬと極きまつたもの  
 ではない。いささかの遅延を忍べばまだまだ悠々として濶歩かつぽすべ  
 き道はいくらかもある。それと同じように現代の生活は亞米利加風アメリカふう  
 の努力主義を以てせざれば食えないと極つたものでもない。髯ひげを  
 生はやし洋服を着てコケを脅おどそうという田舎紳士風の野心さえ起さな  
 ければ、よしや身に一錢たくわえの蓄なく、友人と称する共謀者、先輩も  
 しくは親分と称する阿諛あゆの目的物なぞ一切皆無かひむたりとも、なお優ゆ  
 游ゆう自適うとなの生活を営む方法すくなは尠すくなくはあるまい。同じ露店の大道商  
 人となるとも自分は髭を生し洋服を着て演舌口調に医学の説明で

いかさまの薬を売ろうよりむしろ黙して裏町の縁えんにち日にボツタラ  
 焼やきをやくか糝粉細工しんこざいくでもこねるであろう。苦学生に扮装したこの  
 頃の行商人が横風おうふうに靴音高くがらりと人の家の格子戸こうしどを明け田  
 なかなま  
 舎訛たかこえりの高声たかこえに奥様はおいでかなぞと、ややともすれば強請ゆすり  
 がましい凄味すごみな態度を示すに引き比べて昔ながらの脚半草鞋きやはんわらじに  
 すげがさ  
 菅笠をかぶり孫太郎虫まごたろうむしや水蠟いぼたの虫箱根山むしはこねやま山椒さんしょの魚うお、また  
 は越中富山えつちゅうとやまの千金丹せんきんたんと呼ぶ声。秋の夕ゆうべや冬の朝あしたなぞこの声  
 を聞けば何なにとも知れず悲しく淋しい気がするではないか。

されば私のでくてく歩きは東京という新しい都会の壯觀を称美  
 してその審美的価値を論じようというのでもなく、さればとて熱  
 心に江戸なる旧都の古蹟さくを探りこれが保存を主張しようという訳

でもない。如何いかにとなれば現代人の古美術保存という奴がそもそも古美術の風趣を害する原因で、古社寺の周囲に鉄の鎖を張りペンキ塗ぬりの立札たてふだに例の何々スベカラズをやる位ならまだしも結構。古社寺保存を名とする修繕の請負工事などと来ては、これ全く破壊の暴挙に類する事は改めてここに実例を挙げるまでもない。それ故私は唯目的なくぶらぶら歩いて好勝すきか手かなことを書いていればよいのだ。家うちにいて女房にようぼのヒステリイ面づらに浮世をはかなみ、あるいは新聞雑誌の訪問記者に襲われて折角掃除した火鉢ひばちを敷し島まの吸殻だらけにされるより、暇があったら歩くにしくはない。歩け歩けと思つて、私はてくてくぶらぶらのそのそといろいろに歩き廻るのである。

元來がかくの如く目的のない私の散歩にもし幾分でも目的らしい事があるとすれば、それは何という事なく蝙蝠傘こもりがさに日和下駄ひよりげたを曳摺ひきずつて行く中うち、電車通の裏手なぞにたまたま残っている市区改正以前の旧道に出たり、あるいは寺の多い山の手の横町よこちょうの木立こたちを仰ぎ、溝どぶや堀割の上にかけてある名も知れぬ小橋を見る時など、何となくそのさびれ果てた周囲の光景が私の感情に調和して少時しばし我にもあらず立去りがたいような心持をさせる。そういう無用な感慨に打たれるのが何より嬉しいからである。

同じ荒廃した光景でも名高い宮殿や城じょうかく郭かくならば三体詩さんたいしなぞで人も知っているように、「太掖たいえき勾こうちん陳ちんか処しよしよ処うたがに疑う。薄暮はくぼの毀垣きえん 春雨しゆんうの裏うち。」

あるいはまた、「煬帝春游古城在。壞宮芳草滿人家。」（煬帝の  
しゆんゆう  
しゆんゆう  
せう  
こじょうあ  
かいきゆう  
ほうそう  
じんか  
み「煬帝の  
春游しゆんゆうせる古城こじょう在り。壞宮かいきゆうの芳草ほうそう人家じんかに満つ。」

などと詩にも歌にもして伝えることができよう。

しかし私の好んで日和下駄を曳摺る東京市中の廢址はいしは唯私一個  
人ひとにのみ興趣を催させるばかりで容易にその特徴を説明すること  
の出来ない平凡な景色である。譬たとえば砲兵工廠ほうへいこうしようの煉瓦れんが塀べいに  
その片側を限られた小石川の富坂とみざかをばもう降おり尽つくそうという左  
側がわに一筋の溝川みぞかわがある。その流れに沿うて蒟蒻こんやく閻魔えんまの方かたへ  
と曲まがつて行く横町よこまちなぞ即すなわちその一例である。両側の家や並なみは低く道は  
勝手次第うねに迂まがつていて、ペンキ塗の看板や模造西洋造りの硝子戸ガラスど  
なぞは一軒も見当らぬ処から、折々氷屋の旗ひらめなぞの外ほかには横

町の眺望に色彩というものは一ツもなく、仕立屋芋屋駄菓子屋挑ようちんや灯屋なりわいなぞ昔ながらの職業にその日の暮しを立てている家ばかりである。私は新開町の借家の門口しんかいまちによく何々商会だの何々事務所なぞという木札きくだのれいれいしく下げてあるのを見ると、何という事もなく新時代のかかる企業に対して不安の念を起すと共に、その主謀者の人物についても甚しく危険を感じるのである。それに引ひきかえてこういう貧しい裏町に昔ながらの貧しい渡世とせいをしている年寄を見ると同情と悲哀とに加えてまた尊敬の念を禁じ得ない。同時にこういう家の一人娘うちは今頃周旋屋しゅうせんやの餌えぼになつてどこぞで芸者でもしていはせぬかと、そんな事に思おもいと相もいた変らず日本固有の忠孝の思想と人身売買の習慣との関係やら、つ

づいてその結果の現代社会に及ぼす影響などについていろいろ込み入った考えに沈められる。

ついこの間も麻布網代町辺あざぶあみしろちようへんの裏町を通った時、私は活動写

真や国技館や寄席よせなぞのビラが崖地がけちの上から吹いて来る夏の風に

翻ひるがえっている氷屋の店先みせさき、表から一目に見通される奥の間で十五

六になる娘が清きよもと一元をさらっているのを見て、いつものようにそ

つと歩あゆみを止めた。私は不健全な江戸の音おんぎよく曲とというものが、今

日の世にその命脈を保っている事を訝いぶかしく思うのみならず、今も

つてその哀調がどうしてかくも私の心を刺※するかを不思議に感

じなければならなかった。何気なく裏町を通りかかって小娘の弾ひ

く三味線しゃみせんに感動するようでは、私は到底世界の新しい思想を迎

える事は出来まい。それと共にまたこの江戸の音曲をばれいれいしく電気燈の下で演奏せしめる世俗一般の風潮にも伴つて行く事は出来まい。私の感覚と趣味とまた思想とは、私の境遇に一大打撃を与える何物かの来らざる限り、次第に私をして固陋偏狭ならしめ、遂には全く世の中から除外されたものにしてしまふであらう。私は折々反省しようと力めても見る。同時に心柄なる身の末は一体どんなになつてしまふものかと、いつそ放擲して自分の身をば他人のようにその果敢ない行末に対して皮肉な一種の好奇心を感じる事すらある。自分で己れの身を抓つてこの位力を入れればなるほどの位痛いものだど独りでいじめて独りで涙ぐんでいるようなものである。或時は表面に恬淡洒脱を



粧よそおつているが心の底には絶えず果敢いあきらめを宿している。これがために「涙でよごす白粉おしろいのその顔かくす無理な酒」というような珍しくもない唄うたが、聞く度ごとに私の心には一種特別な刺※を与える。私は後うしろから勢いきおいよく襲い過ぎる自動車の響に狼狽して、表おもてどおり通から日の当らない裏道へと逃げ込み、そして人に後おくれてよろよろ歩み行く処に、わが一家いっかの興味と共に苦しみ、また得意と共に悲哀を見るのである。

## 第二 淫祠

裏町を行こう、横道を歩もう。かくの如く私が好んで日和下駄ひよりげたをカラカラ鳴して行く裏通うらどおりにはきまつて淫祠いんしがある。淫祠は昔から今に至るまで政府の庇護を受けたことはない。目こぼしでそのままに打捨てて置かれれば結構、ややともすれば取払われべきものである。それにもかかわらず淫祠は今なお東京市中数え尽されぬほど沢山ある。私は淫祠を好む。裏町の風景に或趣あやむきを添える上からいつて淫祠は遙はるかに銅像以上の審美的価値があるからである。本所深川ほんじよふかがわの堀割の橋際はしぎわ、麻布芝辺あざふしばへんの極めて急な坂の

下、あるいは繁華な町の倉の間、または寺の多い裏町の角などに  
 立っている小さな祠ほころうやまた雨あまざらしのままなる石地蔵いしじぞうには今も  
 って必ず願掛がんかけの絵馬えまや奉納の手拭てぬぐい、或時は線香などが上げて  
 ある。現代の教育はいかほど日本人を新しく狡猾こうかつにしようと力つと  
 めても今だに一部の愚昧ぐまいなる民の心を奪う事が出来ないのであつ  
 た。路傍ろぼうの淫祠に祈願を籠こめ欠かけたお地藏様の頸くびに涎よだれかけ掛かけをか  
 けてあげる人たちは娘を芸者に売るかも知れぬ。義賊になるかも  
 知れぬ。無尽むじんや富籤とみくじの僥ぎよう倖こうのみを夢見ているかも知れぬ。  
 しかし彼らは他人の私行を新聞に投書して復讐くわだを企てたり、正義  
 人道を名として金をゆすつたり人を迫害したりするような文明の  
 武器の使用法を知らない。

淫祠は大抵その縁起えんぎとまたはその効験こうけんのあまりに荒唐無稽こうとうむけい

な事から、何となく滑稽の趣を伴わすものである。

聖しょう天てん様さまには油あぶら揚あげのお饅まんじゅう頭とうをあげ、大黒だいこく様さまには二ふ

たまただいこん

股大根、お稲荷いなり様さまには油揚あを献あげるのは誰も皆知あっている

処ところである。芝日しばひ蔭かげ町ちょうに鯖さばをあげるお稲荷いなり様さまがあるかと思えば

駒込こまごめには炮烙ほうろくをあげる炮烙地蔵ほうろくじざうというのがある。頭痛こまごめを祈いのつ

てそれが癒なれば御礼ごれいとして炮烙ほうろくをお地藏じざう様の頭あたまの上に載のせるので

ある。御厩ごうま河岸がしの榎かや寺でらには虫菌むししんに効験くげんのある飴あめ嘗なめ地蔵じざうがあり、

金竜山きんりゅうざんの境内けいだいには塩しほをあげる塩地蔵しほじざうというのがある。小こ

石川富坂いしかわとみざかの源覚げんかく寺じにあるお閻魔えんま様さまには蒟こん蒻にやくをあげ、大お

久保百人町くぼひやくにんまちの鬼王きおう様さまには湿瘡しつそうのお礼れいに豆腐とうふをあげる、向むこう

島じまの弘福寺こうふくじにある「石いしの媼ばあさま様」には子供の百日咳ひやくにちぜきを祈つて煎豆いりまめを供そなえるとか聞いている。

無邪氣むじゃぎでそしてまたいかにも下賤げすばつたこれら愚民の習慣は、  
 馬鹿ばか囃子ばやしにひよつとこの踊おどまたは判物はんもの見たような奉納の絵馬えうまの拙つたい絵えを見るのと同じようにいつも限りなく私の心を慰める。単ただに可笑おかしいというばかりではない。理窟りくつにも議論ぎろんにもならぬ馬鹿ばかしい処ところに、よく考えて見ると一種物哀ものあはれれなような妙な心持こころもちのする処ところがあるからである。

### 第三 樹

目に青葉山時鳥やまほととぎす 初鰹はつがつお。江戸なる過去の都会の最も美しい時節における情趣は簡単なるこの十七字にいい尽つくされている。  
 北斎ほくさい及びひろしげ広重ひろしげらの江戸名所めいしよえ絵えがに描かれた所、これを文字もんじに代えたならば、即ちこの一句に尽きてしまふであらう。

東京はその市内のみならず周囲の近郊まで日にち々にち開けて行くばかりであるが、しかし幸にも社寺の境内、私人しじんの邸宅、また崖地がけちや路みちのほとりに、まだまだ夥おびただしく樹木を残している。今や工こうじよ場の煤烟ばいえんと電車の響うとに日本晴にほんばれの空にも鳶とんびヒヨロヒヨロの

声稀まれに、雨あがりのふけた夜に月は出ても蜀ほととぎす魂たまはもう啼なかな  
 くなつた。初鯉あじわいの味とてもまた汽車と氷との便あるがために昔の  
 ようにさほど珍めづしくもなくなつた。しかし目に見る青葉のみに至  
 っては、毎まい年ねん花はなちる後のちの新曆五月となれば、下した町まちの川がはのほと  
 りにも、山の手の坂の上にも、市しち中ゆう到ゆうる処ところその色の美しさにわ  
 れらは東京なる都市に対して始めて江戸伝来の固有なる快感を催  
 し得るのである。

東京に住む人、試こころみに初あめて袷あわせを着たその日の朝といわず、昼と  
 いわず、また夕暮といわず、外そと出での折せの道みちすから、九段くだんの坂上、  
 神田かんだの明み神ようじん、湯島ゆしまの天てん神じん、または芝あたごの愛宕山こやまなど、随ま処ところ  
 の高台に登つて市中を見渡したまえ。輝きらく初夏しよかの空そらの下した、際限しな

くつづく瓦屋根の間々あいだあいだに、あるいは銀杏いちよう、あるいは椎しい、檜かし柳かしなど、いずれも新緑の色鮮あざやかなる梢こずえに、日の光うるわの麗うるわしく照添てりそうさまを見たならば、東京の都市は模倣ぶくりの西洋造と電線と銅像とのためにいかほど醜みにくくされても、まだまだ全く捨てたものでもない。東京にはどこと云つて口にはいえぬが、やはり何となく東京らしい固有な趣があるような気がするであろう。

もし今日の東京に果して都会美なるものがあり得るとすれば、私はその第一の要素をば樹木と水流まに俟まつものと断言する。山の手を蔽おほう老樹と、下町を流れる河とは東京市の有する最も尊い宝である。巴里パリの巴里パリたる体裁ていさいは寺院宮殿劇場等の建築があればたと縦たえ樹と水なくとも足りるであろう。しかるにわが東京において



はもし鬱然うつぜんたる樹木なくんばかの壯麗なる芝山内の靈廟れいびようとても完全にその美とその威儀とを保つ事は出来まい。

庭を作るに樹と水の必要なるはいうまでもない。都会の美観を作るにもまたこの二つを除くわけには行かない。幸にも東京の地には昔から夥おびただしく樹木があつた。今なお芝田村町に残つている公孫樹いぢようの如く徳川氏入国にゆうこく以前からの古木だといひ伝えられているものも少くはない。小石川久堅町こいしかわひさかたまちなる光円寺こうえんじの大銀杏ちよう、また麻布善福寺あさぶぜんぷくじにある親鸞上人しんらんしようにんてうえ手植の銀杏と称せられるものの如き、いずれも数百年の老樹である。浅草観音あさくさかんのんど堂どうのほとりに名高い銀杏の樹は二株ふたかぶもある。小石川植物園内の大銀杏は維新後危あやうく伐り倒されようとした斧おのの跡が残つてい

るために今ではかえつて老樹を愛重する人の多く知る処とな

っている。東京市中にはもしそれほどの故事来歴を有せざる銀杏

の大木を探り歩いたならまだなかなか数多いことであろう。小石

川水道端なる往來の真中に立っている第六天の祠の側、また

柳原通の汚い古着屋の屋根の上にも大きな銀杏が立っている。

神田小川町の通にも私が一橋の中学校へ通う頃には大

きな銀杏が煙草屋の屋根を貫いて電信柱よりも高く聳えていた。

麴町の番町辺、牛込御徒町辺を通れば昔は旗本の屋敷ら

しい邸内の其処此処に銀杏の大樹の立っているのを見る。

銀杏は黄葉の頃神社仏閣の粉壁朱欄と相對して眺むる時、

最も日本らしい山水を作す。ここにおいて浅草観音堂の銀杏はけ

だし東都の公孫樹中の冠たるものといわねばならぬ。明和のむかし、この樹下に楊枝店柳屋あり。その美女お藤の姿は今に鈴すずきはるのぶいつびつさいぶんちよう  
木春信 一筆齋文調らの錦絵に残されてある。

銀杏に比すれば松は更によく神社仏閣と調和して、あくまで日本らしくまた支那らしい風景をつくる。江戸の武士はその邸宅に花ある木を植えず、常磐木の中にも殊に松を尊たつとび愛した故に、もと元武家の屋敷のあつた処には今もなお緑の色かえぬ松の姿にそぞろ昔を思わせる処が少くない。市ヶ谷の堀端に高力松、高たかた  
田老松町に鶴亀松がある。広重の絵本『江戸土産』によ  
つて、江戸の都人士が遍く名高い松として眺め賞したるものを挙

ぐればおなぎがわ小名木川の五本松、はっけいざか八景坂のよろいかけまつ鎧掛松、あざぶ麻布の一本松、てらしまむられんげじ寺島村蓮華寺のすえひろまつ末広松、あおやまりゆうがんじ青山竜巖寺のかさまつ笠松、かめいどふも亀井戸普んいん門院のおこしかけまつ御腰掛松、やなぎしまみようけんどう柳島妙見堂の松、ねぎし根岸のおぎようまつ御行の松、すみだがわ隅田川のしゆびまつ首尾の松なぞその他なおいくらもあろう。しかし大正三年の今日幸にこし枯死せざるものいくばくぞや。

青山竜巖寺の松は北齋の錦絵『ふがくさんじゆうろつけい富嶽卅六景』中にも描かれてある。私は大久保のわびずまい佗住居より遠くもあらぬ青山を目がけていたが、堂宇は見るかげもなく改築せられ、境内狭しと建てられた貸家かしやに、松は愚か庭らしい閑地あきちさえ見当らなかつた。この近

くに山の手の新日暮里しんにつぼりといわれて、日暮里の花見寺はなみでらに比較せられた仙寿院せんじゅいんの名園ある事は、これも『江戸名所図絵』えどめいしよずえで知つてゐる処から、日和下駄ひよりげたの歩きついでに尋ねあてて見れば、古びた惣門そうもんを潜くぐつて登る石段の両側に茶の木の美しく刈込まれたるに辛くも昔を忍ぶのみ。庭は跡方あとかたもなく伐開きりひらかれ本堂の横手の墓地も申訳らしく僅わずかな地坪じつぼを残すばかりであつた。

今日こんにち上野博物館の構内に残つてゐる松は寛永寺かんえいじの旭あさひの松まつまたは稚児ちごの松まつとも称せられたものとやら。首尾の松は既に跡なけれど根岸にはなお御行の松すこやかの健すこやかなるあり。麻布本村町ほんむらちようの曹そうけ溪寺いじには絶江ぜつこうの松まつ、二本榎高野山にほんえのきこうやさんには独鈷どっこの松まつと称せられるものがある。その形古かたちき絵に比べ見て同じようなればいずれ

も昔のままのものであろう。

柳は桜と共に春来ればこきまぜて都の錦を織成すもの故、市しちゆ

中の樹木を愛するもの決してこれを閑かんきやく却する訳には行くま

い。桜には上野の秋色しゅうしきざくら、平川天神の鬱金の桜、麻布

筭町長谷寺の右衛門桜、青山梅窓院の拾桜ひろいざくら、ま

た今日はあるやなしや知らねど名所絵にて名高き渋谷の金王こんのうざく

桜、柏木かしわぎの右衛門桜、あるいはまた駒込吉祥寺こまごめきちょうじの並木なみきの

桜ざくらの如く、来歴あるものを搜もとむれば数多あまたあろうが、柳に至つては

これといつて名前のあるものは殆どないようである。

隋の煬帝ようだい長安ちやうあんに顕仁宮けんじんきゆうを営いとむや河南かなんに済渠さいきよを開き

堤つつみに柳を植うる事一千三百里という。金きん殿玉でんぎよ楼よくろうその影りよくを緑りよく  
 波はに流す処 春しゅん風ふうに柳りゅう絮じよは雪と飛び黄こう葉ようは秋しゅう風ふうに  
 菲ひ々ひとして舞うさまを想おも見いれば宛さなら青貝びやうの屏風ふう七宝しつぽうの古陶  
 器を見る如き色彩の眩惑を覚ゆる。けだし水の流に柳の糸のなび  
 きゆらめくほど心地よきはない。東都柳やなぎ原わらの土手には神田川  
 の流に臨んで、筋すじ違かいの見附みつけから浅草あさくさ見附みつけに至るまで 々さんと  
 して柳やなぎが生お茂いつていたが、東京に改められると間もなく堤は取  
 崩されて今見る如き赤煉瓦の長屋に変わってしまった。土手を取崩  
 したのは『武江年表』によれば明治四年四月またここに供長家を  
 立てたのは明治十二、三年頃である。

柳やなぎ橋ばしに柳なきは既に柳りゅう北ほく先生『柳橋新誌』に「橋

以柳為名而不植一株之柳〔橋は柳を以て名と為すに、一株の柳も植えず〕とある。しかして、両国橋よりやや川下の溝に小橋あつて、元柳橋といわれここに一樹の老柳ありしは柳北先生の同書にも見えまた、小林清親翁が東京名所絵にも描かれてある。図を見るに、川面籠る朝霧に、両国橋薄墨にかすみ渡りたる此方の岸に、幹太き一樹の柳少しく斜になりて立つ。その木蔭に縞の着流の男一人、手拭を肩にし、後向きに水の流れを眺めている。閑雅の趣、自ら画面に溢れ、何となく猪牙舟の艚声と、鳴く音さえ聞き得るような心地がする。かの柳はいつの頃枯れ朽ちたのであろう。今は河岸の様子も変り、小流も埋立てられてしまったので、元柳橋の跡も尋ねにくい。



半蔵御門はんぞうごもんより外桜田そとさくらだの堀あるいはまた日比谷馬場先和田倉ひびやばさきわだくら  
 御門外ごもんそとへかけての堀端ほりばたには一斉に柳が植つていて処々に水みずま  
 撒まの車が片寄せてある。この柳は恐らく明治になつてから植え  
 たものであろう。広重が東都名勝の錦絵の中うち外桜田の景を看ても  
 堀端の往来際おうらいぎわには一本の柳とても描かれてはいない。土手を下  
 りた水際みずぎわの柳の井戸の所に唯一株ひとかぶの柳があるばかりである。余  
 の卑見ひけんを以てすれば、水を隔へだてて対岸なる古城の石垣と老松を望  
 まんには、此方の堤に柳あるは眺望せうぼうを遮りまた眼界を狭くするの  
 嫌きらあるが故にむしろなきに如しくはない。いわんやかかる処に西洋  
 風の楓かえでの如きを植うるにおいてをや。

東京市は頻しきりに西洋都市の外観に倣ならわんと欲して近頃この種の楓

または橡とちたぐいの類を各区の路傍に植付けたが、その最も不調和なるは  
 赤坂紀あかさかきの国坂くにざかの往来に越す処はあるまい。赤坂離宮のいかに  
 も御所らしく京都らしく見える筋堀すじべいに対して異国種いこくだねの楓の並  
 木は何たる突飛とつぴぞや。山の手の殊に堀近き処の往来には並木の用  
 は更にない。並木の緑なくとも山の手一帯には何処という事なく  
 樹木が目につく。並木は繁華の下町において最も効能がある。銀  
 座駒形んざこまがた人形にんぎょう町通うちょうどおりの柳の木こかげに夏の夜よの露店にぎわ賑う有様  
 は、煽風器せんふうきなくとも天然の涼風自在に吹通ふきかよう星の下したなる一大  
 勧工場かんこうばにひとしいではないか。

都下の樹木にして以上の外ほかな有名なるは青山練兵場内のナン  
 ジャモンジャの木、本郷ほんごう西片町にかたまち阿部伯爵家の椎しい、同区ゆみちよ弓

町の<sup>おおくすのき</sup>大樟、  
ば一々述べず。

芝<sup>しば</sup>三<sup>みた</sup>田<sup>はち</sup>蜂<sup>すか</sup>須<sup>は</sup>賀<sup>ち</sup>侯<sup>す</sup>爵<sup>か</sup>邸<sup>か</sup>の<sup>か</sup>椎<sup>か</sup>な<sup>か</sup>ぞ<sup>か</sup>が<sup>か</sup>あ<sup>か</sup>る。<sup>わ</sup>煩<sup>ず</sup>し<sup>ら</sup>けれ

## 第四 地図

蝙蝠傘こうもりがさを杖ひよりげたに日和下駄ひきずを曳摺ひきずりながら市中しちゆうを歩む時、私はいつも携帯に便なる嘉永板かえいばんの江戸切図えどきりずを懐中ふところにする。これは何も今時出版する石版摺せきばんずりの東京地図を嫌ことさらつて殊更ことさら昔の木版絵図を慕うというわけではない。日和下駄曳摺ひきずりながら歩いて行く現代の街路をば、歩きながらに昔の地図に引合せて行けば、おのずから勞せずして江戸の昔と東京の今とを目のあたり比較対照する事ができるからである。

例えば牛込うしごめ弁天町べんてんちやう辺へんは道路取りひろげのため近頃全く面

目を異ことにしたが、その裏うらどおり通となる小流こながれに今なおその名を残す  
 根来橋ねごろばしという名前なぞから、これを江戸切図に引合せて、私は  
 歩きながらこの辺へんに根来組同心ねごろくみどうしんの屋敷のあつた事を知る時なぞ、  
 歴史上の大発見でもしたように訳もなくむやみと嬉しくなるので  
 ある。かような馬鹿馬鹿しい無益な興味の外ほかに、また一ツ昔の地  
 図の便利な事は雪月花せつげつかの名所や神社仏閣の位置をば殊更目につ  
 きやすいように色摺いろずりにしてあるのみならず時としては案内記の  
 ようにこの処より何々まで凡およそいくちよう幾町植木屋多しなぞと説明が  
 加えてある事である。凡そ東京の地図にして精密正確なるは陸地  
 測量部の地図に優まさるものはなからう。しかしこれを眺めても何ら  
 の興味も起らず、風景の如何いかんをも更に想像する事が出来ない。土

地の高低を示す蚰蜒げじげじの足のような符号と、何万分の一とか何とかいう尺度ものさしいってんばり一点張ちんぱうの正確と精密とはかえつて当意即妙の自由を失い見る人をして唯煩雜ただの思をなさしめるばかりである。見よ不正確なる江戸絵図は上野の如く桜咲く処には自由に桜の花を描き柳原やなぎわらの如く柳ある処には柳の糸を添え得るのみならず、また飛鳥山あすかやまより遠く日光筑波にっこうつくばの山々を見ることを得れば直ただちにこれを雲の彼方かなたに描示えがきしめすが如く、臨機応変に全く相反せる製図の方式態度を併用して興味津々しんしんよく平易にその要領を会得せしめてゐる。この点よりして不正確なる江戸絵図は正確なる東京の新地図よりも遙はるかに直感的また印象的方法に出でたものと見ねばならぬ。現代西洋風の制度は政治法律教育万般のことことごとくこれに

等しい。現代の裁判制度は東京地図の煩雜なるが如く、大岡越おおおかえちぜ前守まんのかみの眼力がんりきは江戸絵図の如し。更に語ごを換かゆれば東京地図は幾何学の如く江戸絵図は模様ようばうのようである。

江戸絵図はかくて日和下駄蝙蝠傘と共に私の散歩には是非ともなくてはならぬ伴はんりよ侶りよとなつた。江戸絵図によつて見知らぬ裏町うらまちを歩あゆみ行けば身おのずかは自らその時代にあるが如き心持となる。實際現在じゆうの東京中じゆうには何処いずこに行くとも心より恍惚くわうくわうとして去るに忍しのびざるほど美麗びんりなもしくは荘嚴じゆうげんな風景建築ふうけいけんちくに出遇であわぬかぎり、いろいろと無理な方法を取りこれによつて纔わずかに幾分の興味きんみを作つくりださねばならぬ。然しからざれば如何いかにに無聊ぶりようなる閑人かんじんの身にも現今の東京は全く散歩に堪たえざる都会たいではないか。西洋文学から得た輸入思

想を便りにして、例えば銀座の角のライオンを以て直ちに巴里の  
 カツフェーに擬し帝国劇場を以てオペラになぞらえるなぞ、むや  
 みやたらに東京中を西洋風に空想するのも或人にはあるいは有益  
 にして興味ある方法かも知れぬ。しかし現代日本の西洋式偽文  
 明が森永の西洋菓子ともがらの如く女優のダンスの如く無味拙劣なるも  
 のと感じられる輩ともがらに対しては、東京なる都会の興味は勢尚古的  
 退歩的たらざるを得ない。われわれは市ヶ谷外濠いちちやそとほりの埋立工事を  
 見て、いかにするとも将来の新美観を予測することの出来ない限  
 り、愛惜の情は自ら人をしてこの堀に藕花ぐうかの馥郁ふくいくとした昔を  
 思わしめる。

私は四谷見附よつやみつけを出てから迂曲うきよくした外濠つつみの堤の、丁度その曲まがり



角かどになつてゐる 本村町ほんむらちようの坂上に立つて、次第に地勢の低く  
 なり行くにつれ、目のとどくかぎり市ヶ谷から牛込うしごめを経て遠く  
 小石川の高台を望む景色をば東京中での最も美しい景色の中に数  
 えている。市ヶ谷八幡はちまんの桜早くも散つて、茶ちゃの木きいなり稲荷の茶の木  
 の生垣いけがき伸び茂る頃、濠端ほりばたづたいの道すがら、行手に望む牛込ゆくて  
 小石川の高台かけて、緑滴みどりだたる新樹の梢こずえに、ゆらゆらと初夏しよかの雲涼  
 し気げに動く空を見る時、私は何のいわれもなく山の手のこの辺あたりを  
 中心にして江戸の狂歌が勃興した天明てんめい時代の風流を思おもい起おこす  
 のである。『狂歌才蔵集』夏の巻まきにいわずや、

首夏しゆか

馬場金埒ばばきんらち

花はみなおろし大根だいこんとなりぬらし鯉かつおに似たる今朝けさの横雲

新樹

紀躬鹿きのみじか

花の山にほひ袋の春過ぎて青葉ばかりとなりにけるかな

更衣ころもがえ

地形方丸じぎようかたまる

夏たちて布子ぬのこの綿はぬきながらもとのこる春のはながみ帟  
江戸の東京と改称せられた当時の東京絵図もまた江戸絵図と同  
じく、わが日和下駄の散歩に興味を添えしむるものである。

私は小石川なる父の家の門札もんふだに、第四大区だいいく第何小区何町何番  
地と所書ところがきのしてあつたのを記憶している。東京府が今日の如

く十五区六郡に区劃されたのは、丁度私の生れた頃のこと。それ  
 までは十一の大区に分たれていたのである。私は柳北りゅうほくの隨筆、  
 芳よし幾いくの錦にしき絵え、清きよ親ちかのきよちか名所絵、これに東京絵図を合せ照して  
 しばしば明治初年の渾こん沌とんたる新時代の感覺に觸るる事を樂し  
 みとする。

市しち中ちゆうを散歩しつつこの年代の東京絵図を開き見れば諸しよ処しよの  
 重おも立だつた大名屋敷は大抵海陸軍の御用地となつてゐる。下谷したや佐竹さたけ  
 の屋敷は調練場ちようれんばとなり、市ヶ谷とつかむらと戸塚とつかむら村なる尾州びしゆう侯こうの藩邸はんてい、  
 小石川なる水戸の館かんでい第だいも今日われわれの見る如く陸軍の所轄しよかつ  
 となり名高き庭苑も追々に踏み荒されて行く。鉄砲洲てつぱうずなる白しら河かわ  
 楽翁公わらくおうこうが御下屋敷おしもやしきの浴恩園よくおんえんは小石川こうらくえんの後楽園と並んで

江戸名苑の一に数えられたものであるが、今は海軍省の軍人ががやがやよりあつま寄集クラブつて酒を呑む俱樂部のようなものになつてしまつた。江戸絵図より目を転じて東京絵図を見れば誰しも仏蘭西フランス革命史を読むが如き感に打たれるであらう。われわれはそれよりも時としては更に深い感慨に沈められるといつてもよい。何故なにゆえなれば、仏蘭西の市シトワイヤン民は政變のために軽々しくヴェルサイユの如きルウブルの如き大なる国民的美術的建築物を壊こぼちはしなかつたからである。現代官僚の教育は常に孔こう孟もうの教を尊こび忠孝仁義の道を説くと聞きいているが、お茶の水を過すぎる度々「仰ぎ高こう」の二字を掲げた大成たいせい殿でんの表門を仰あげば、瓦は落ちたるままに雑草も除とかず風雨の破壊するがままに任せてある。しかして世人の更に

これを怪しまざるが如きに至つては、われらは唯唾然あぜんたるより外ほかはない。

## 第五 寺

杖つえのかわりの蝙蝠傘こうもりがさと共に私が市中しちゆう散歩の道しるべとなる昔えどきりえずの江戸切絵図えずを開き見れば江戸中には東西南北到る処おびただに夥しく寺院神社の散在していた事がわかる。江戸の都会より諸侯の館邸と武家ぶけの屋敷と神社仏閣を除いたなら残る処の面積は殆どない位くらゐであろう。明治初年神仏の区別を分ぶんめい明めいにして以来殊には近年に至つて市区改正のため仏寺の取払いとなつたものは尠すくなくない。それにもかかわらず寺院は今なお市中何処いずこという限りもなく、あるいは坂の上崖がけの下、川のほとり橋きわの際きわ、到る処にその門と堂の屋

根そびやかを聳おこしている。一箇所大きい寺のあるあたりには塔たつちゆう中うちまた

寺じちゆう

中と呼ばれて小さい寺が幾軒も続いている。そして町の名さ

え寺てらまち

町といわれた処は下谷したや浅草あさくさ牛込うしごめ四谷よつや芝しばを始め各区に渡

つてこれを見出すことが出来る。私は目的めあてなく散歩うちする中おのず

からこの寺の多い町の方へとのみ日ひ和下より駄げを曳ひ摺きつて行く。

上野うえの寛永かんえい寺じ

の楼閣ろうかくは早く兵火へいに罹かり芝しば増ぞう上じょう寺じの本堂ほんだうも祝し

融ゆうの災わざに遭あう事じ再三さんさん。

谷や中天な王てん寺のうじは僅わずかに傾かける五重塔ごじゆうたつに往お

時うじの名残なごりを留とどむるばかり。

本所ほんじよ羅漢らかん寺じの螺さざえ堂どうも既に頽たふ廃はいし

内なか

なる五百の羅漢のみ幸に移されてその大半を今や郊外めくろ目黒めぐろの一

寺院じいんに見る。かくては今日東京市中の寺院にして輪りん奂かんの美じん人も

目を眩惑くせしむるものは僅に浅草あさくさの観音堂くわんおんどう音羽おとわご護国寺こくこくじの山門さんもん

その他<sup>た</sup>二、三に過ぎない。歴史また美術の上よりして東京市中  
 の寺院がさしたる興味を牽<sup>ひ</sup>かないのは当然の事である。私は秩序  
 を立てて東京中の寺院を歴訪しようという訳でもなく、また強<sup>し</sup>い  
 て人の知らない寺院をさがし出そうと企<sup>くわ</sup>てている訳でもない。私  
 は唯古<sup>ただ</sup>びた貧しい小家<sup>こいえ</sup>つづきの横<sup>よこちよう</sup>町<sup>まち</sup>などを通り過<sup>す</sup>る時、ふと  
 路のほりに半ば崩れかかった寺の門を見付けてああこんな処<sup>ところ</sup>に  
 こんなお寺があつたのかと思<sup>おも</sup>いながら、そつとその門<sup>もん</sup>口<sup>ぐち</sup>から境<sup>けい</sup>  
 内<sup>い</sup>を窺<sup>うかが</sup>い、青々とした苔と古池に茂った水草の花を見るのが何  
 となく嬉しいというに過ぎない。京都鎌倉あたりの名高い寺々を  
 見物するのは異<sup>こと</sup>な<sup>な</sup>、東京市中に散在したつまらない寺にはま  
 た別種の興味がある。これは単独に寺の建築やその歴史から感<sup>かん</sup>ず



る興味ではなく、いわば小説の叙景もしくは芝居の道具立どうぐだてを見  
 るような興味に似ている。私は本所深川ほんじよふかがわへん辺の堀割を散歩する  
 折夕ゆうしお汐の水が低い岸から往来まで溢れかかつて、荷船にぶねや肥料船こえぶね  
とまの笹が貧家の屋根よりもかえつて高く見える間からふと彼方かなたに巍ぎ  
 然ぜんとして聳そびゆる寺院の屋根を望み見る時、しばしば黙阿弥劇中の  
 背景を想い起すのである。

かくの如き溝泥臭どぶどろくさい堀割と腐くさつた木の橋と肥料船や芥船ごみぶねや  
 棟割長屋むねわりながやなぞから成立つ陰惨な光景中に寺院の屋根を望み木もくぎ  
 魚よと鐘とを聞く情趣おもむきは、本所と深川のみならず浅草下谷したやへん辺  
 においてももまた変る処がない。私は今近世の社会問題からは全く  
 隔離して仮に単独な絵画的詩興の上からのみかかると貧しい町の光

景を見る時、東京の貧民窟には竜動ロンドンや紐育ニューヨークにおいて見るが  
 如き西洋の貧民窟に比較して、同じ悲惨うちな中にも何処どことなくい  
 べからざる静寂ひその気が潜ひそんでいるように思われる。尤も深川小名  
 木川ぎがわから猿江さるえあたりの工場町こうじようまちは、工場の建築と無数の煙筒えんとう  
 から吐く煤烟と絶間なき機械の震動とによりて、やや西洋風なる  
 余裕なき悲惨なる光景を呈きたし来きたつたが、今然しからざる他たの場所の貧  
 しい町を窺うかがうに、場末の路地や裏長屋には仏教的迷信を背景にし  
 て江戸時代から伝襲きたし来きたつたそのままなる日蔭の生活がある。怠  
 惰にして無責任なる愚民の疲労せる物哀れな忍従の生活がある。  
 近来一部の政治家と新聞記者とは各自党派の勢力を張らんがため  
 に、これらの裏長屋にまで人権問題の福音ふくいんを強しいようと急あせり立

つている。さればやがて数年ののち後には法華のほっけ団扇太鼓や百万  
 遍んの声全く歇やみ路地裏の水道 共き用よう栓せんの周まわり囲からは人権問題  
 と労働問題の喧かしましい演説が聞かれるに違いない。しかし幸か不幸  
 かいまだ全く文明化せられざる今日においてはかかる裏長屋の路ろ  
 地内じうちには時として巫女いちこが梓あずさ弓ゆみの歌も聞かれる。清元きよもとも聞か  
 れる。孟蘭盆うらぼんの燈籠とうろうや果敢はかない迎むかい火びの烟けむりも見られる。彼らが  
 江戸の専制時代から遺伝し来ったかくの如き果敢はかない裏淋あきらしい諦あきら  
 めの精神修養ぜんじが漸次新時代の教育その他のために消滅し、徒いたずららに覚  
 醒と反抗の新空気に触れるに至ったならば、私はその時こそ真に  
 下層社会の悲惨な生活が開始せられるのだ。そして政治家と新聞  
 記者とが十分に私欲を満す時が来るのだと信じている。いつの世

にか弱いものの利を得た時代であろう。弱い者が自らみずかその弱い事を忘れ軽々しく浮薄なる時代の声に誘惑されようとするのは、誠に外の見る目も痛ましい限りといわねばならぬ。

私は敢て自分一家の趣味ばかりのために、古寺ふるでらと荒れた墓場とその附近なる裏屋の貧しい光景とを喜ぶのではない。江戸専制時代の迷信と無智とを伝承した彼らが生活の外形に接して直ちにこれを我が精神修養の一助になさんと欲するのである。実際私は下谷浅草本所深川あたりの古寺の多い溝どぶざわ際の町を通る度々、見るもの聞くものから幾多の教訓と感慨とを授けられるか知れない。私は日進月歩する近世医学の効験こうけんを信じないのでは決してない。電気治療もラヂウム鉱泉の力をもあながち信用しないのではない。

しかし私はここに不衛生なる裏町に住んでいる果敢ない人たちが  
今なお迷信と煎せんじぐすり薬くすりとにその生せいめい命めいを托たくしこの世を夢と簡単に  
あきらめをつけている事を思えば、私は医学の進歩しなかつた時  
代の人々の病苦災難に対する態度の泰然たると、その生活の簡易  
なると対して深く敬慕の念なきを得ない。およそ近世人の喜び  
迎えて「便利」と呼ぶものほど意味なきものはない。東京の書生  
がアメリカ人の如く万年筆を便利として使用し始めて以来文学に  
科学にどれほどの進歩が見られたであろう。電車と自動車とは東  
京市民をして能よく時間の節儉せつけんを実施させているのであろうか。

私はかように好んで下した町まちの寺とその附近の裏町を尋ねて歩くと共にまた山の手の坂道に臨んだ寺をも決して閑却しない。山の

手の坂道はしばしばその麓ふもとに聳え立つ寺院の屋根樹木と相俟あいまつて一幅の好画こうが図をつくることがある。私は寺の屋根を眺めるほど愉快なことはない。怪異なる鬼おに瓦がわらを起点として奔流の如く傾斜する寺院の瓦屋根はこれを下から打仰うちあおぐ時も、あるいはこれを上から見下みおろす時も共に言うべからざる爽快の感を催もよおさせる。近来日本人は土木ことうの工を起すごとに力つとめて欧米各国の建築を模倣せんとしているが、私の目にはいまだ一ツとして寺観の屋根を仰ぐが如き雄大なる美感を起させたものはない。新時代の建築に対するわれわれの失望は啻ただに建築の様式のみに留まらず、建築と周囲の風景樹木等の不調和なる事である。現代人の好んで用ゆる煉瓦の赤あか色いろと松杉の如き植物の濃く強き緑りよくしよく色と、光線の烈しき日

本固有のらんしよく藍色の空とは何たる永遠の不調和であろう。日本の自然はことごと尽く強い色彩を持つている。これにペンキあるいは煉瓦れんがの色彩を対峙せしめるのは余りに無謀といわねばならぬ。こころみ試に寺院の屋根とひさし廂と廻廊を見よ。日本寺院の建築は山に河に村に都に、いかなる処においても、必ずその周囲の風景と樹木と、また空の色とに調和して、ここに特色ある日本固有の風景美を組織している。日本の風景と寺院の建築とはりよりようあいま両々相俟つて全く引離すことが出来ないほどに混和している。京都うじ宇治奈良みやじま宮島日光等の神社仏閣とその風景との関係は、暫らくこれを日本旅行者の研究に任せて、私はここにそれほど誇るに足らざる我が東京市中のものについてこれをみ観よう。

不忍しのぼずの池いけに泛うかぶ弁天堂とその前の石橋いしばしとは、上野の山おを蔽お  
 う杉と松とに對して、または池一面に咲く蓮はすのはな花はなに對して最も  
 よく調和したものではないか。これらの草木そうもくとこの風景とを眼  
 前に置きながら、殊ことさら更に西洋風の建築または橋梁を作つて、そ  
 の上から蓮の花や緋鯉ひごいや亀の子などを平氣で見ている現代人の心  
 理は到底私には解釈し得られぬ處である。浅草觀音堂とその境けいだ  
 内いに立つ銀杏いちようの老樹、上野の清水堂きよみずどうと春の桜秋の紅葉もみじの對  
 照もまた日本固有の植物と建築との調和を示す一例である。  
 建築は元もとより人工のものなれば風土氣候の如何いかにによらず亞細亞  
 の土上どじょうに歐羅巴ヨウロッパの塔たつを建るも容易であるが、天然の植物に至  
 つては人意のままに猥みだりにこれを移し植えることは出来ない。無情



の植物はこの点において最大の芸術家哲学者よりも遙はるかによく己れを知っている。私は日本人が日本の国土に生ずる特有の植物に対して最少もすこし深厚なる愛情を持つていたなら、たとえ西洋文明を模倣するにしても今日の如く故国の風景と建築とを毀損きそんせずに済んだであろうと思つている。電線を引くに不便なりとて遠慮えしやく会え積やくもなく路傍ろぼうの木を伐りき、または昔からなる名所めいしよの眺望ゆいしよや由緒のある老樹にも構わずむやみやたらに赤煉瓦の高い家を建てる現代の状態は、実に根柢こんていより自国の特色と伝来の文明とを破却はきやくした暴挙といわねばならぬ。この暴挙あるがために始めて日本は二十世紀の強国になつたというならば、外観上の強国たらんがために日本はその尊き内容を全く犠牲にしてしまつたものである。

私は上野博物館の門内に入る時、ひょうけいかんかたわら表慶館の傍に今なお不思議

にも余命を保っている老松の形と赤煉瓦の建築とを対照して、

これが日本固有の貴重なる古美術を収めた宝庫かと誠に奇異なる

感に打たれる。にほんばし日本橋のおおどおり大通を歩いて三井三越を始めこの

へん辺に競うて立つアメリカ風の高い商店を望むごとに、私はもし東

京市の実業家が真に日本橋といするがちよう駿河町と呼ぶ名称の何たるか

を知りこれに対する伝説の興味を感じていたなら、繁華な市しちゆう中

からも日本にほんばれ晴の青空遠く富士山を望み得たという昔の眺望の幾

分を保存させたであろうと愚ぐにもつかぬ事を考え出す。私は外そとほ

濠りの土手に残った松の木をば雪の朝月あしたゆうげの夕ゆうべ折々の季節につれ

て、現今の市中第一の風景として悦よろこぶにつけて、近頃よつやみつけう四谷見附

内に新築された大きな赤い耶蘇やその学校の建築をば心の底から憎まねばならぬ。日常かかる不調和な市街の光景に接した目を転じて、一度市内に残された寺院神社を訪とえばいかにつまらぬ堂宇もまたいかに狭い境内けいだいも私の心には無限の慰藉いしやを与えずにはない。

私は市中の寺院や神社をたずね歩いて最も幽邃ゆうすいの感を与えられるのは、境内に進入すすみいして近く本堂の建築を打仰ぐよりも、路傍そうもんに立つ惣門くぐを潜り、彼方かなたなる境内の樹木と本堂鐘楼等の屋根を背景にして、その前に聳そびえる中門ちゅうもんまたは山門をば、長い敷石道の此方こなたから遠く静に眺め渡す時である。浅草の観音堂について論ずれば雷門かみなりもんは既に焼失やけうさせてしまったが今なお残る二一王におうも

門をば仲店ななみせの敷石道から望み見るが如き光景である。あるいはまた麻布広尾橋あざぶひろおほしの袂たもとより一本道の端はすれに祥雲寺しょううんじの門を見る如き、あるいは芝大門しばだいもんの辺へんより道の両側に塔たつちゆう中の寺々いらか蕞をを連ぬるその端れに当つて遙に朱塗しゆぬりの楼門を望むが如き光景である。私はかくの如き日本建築の遠景についてこれをば西洋で見た巴里パリの凱旋門がいせんもんその他の眺望たに比較すると、氣候と光線の關係故か、唯何ただとはなしに日本の遠景は平たく見えるような心持がする。この点において歌川うたがわ豊春とよはるらの描いた浮絵うきえの遠景木板画にはどうかすると真しんによくこの日本の感情を示したものがある。

私は適度の距離から寺の門を見る眺望と共にまた近寄つて扉の開かれた寺の門をそのままの額縁がくぶちにして境内うかがを窺い、あるいは

また進み入つて境内よりその門外を顧る光景に一段の画趣を覚える。既に『大窪おおくぼだより』その他の拙著において私は寺の門口もんぐちからその内外を見る景色の最も面白きは浅草の二王門及び隨身門ずいじんもんである事を語つた。然されば今更ここにその興味を繰返して述べる必要はない。

寺の門はかくの如く本堂の建築とは必ず適度の距離に置かれ、境内に入るものをしてその眺望よりして自ら敬虔おのずか けいけんの心を起さしめるように造られてある。寺の門は宛さながら西洋管絃楽の序曲プレリユードの如きものである。最初に惣門そうもんありその次に中門ちゅうもんあり然る後幽邃なる境内あつてここに始めて本堂が建てられるのである。神社について見るもまず鳥居とりいあり次に楼門あり、これを過ぎて始め

て本殿に到る。皆相応の距離が設けられてある。この距離あつて始めて日本の寺院と神社の威厳が保たれるのである。されば寺院神社の建築を美術として研究せんと欲するものは、単独にその建築を觀みるに先立つて、広く境内の敷地全体の設計並びにその地勢から觀察して行かねばならぬ。これ既にゴンスやミジヨンの如き日本美術の研究者また旅行者の論ずるが如く、日本寺院の西洋と異なる所以ゆえんである。西洋の寺院は大抵単独に路傍ろぼうに屹立きつりつしているのみであるが、日本の寺院に至つては如何なる小さな寺といえども皆門みなを控えている。芝増上寺しばぞうじょうじの楼門ろうもんをしてかくの如く立派に見せようがためにはその門前なる広い松原が是非とも必要になつて来るであらう。麴町日枝神社こうじまちひえじんじやの山門さんもんの甚だ幽邃ゆうすい

なる理由を知らんには、その周囲なる杉の木立のみならず、前に控えた高い石段の有無をも考えねばなるまい。日本の神社と寺院とはその建築と地勢と樹木との寔に複雑なる綜合美術である。されば境内の老樹にしてもしその一株を枯死せしむれば、全体より見て容易に修繕しがたき破損を来さしめた訳である。私はこの論法により更に一步を進めて京都奈良の如き市街は、その貴重な古社寺の美術的效果に対して広く市街全体をもその境内に同じきものとして取扱わねばならぬと思つてゐる。即ちかかる市街の停車場旅館官衙学校等は、その建築の体裁も出来得る限りその市街の生命たる古社寺の風致と歴史とを傷けぬよう、常に慎重なる注意を払うべき必要があつた。しかるに近年見る所の京都の道

路家屋並ならびに橋梁の改築工事の如きは全く吾人ごじんの意表に出いでたものである。日本いかに貧国たりとも京都奈良の二旧都をそのままに保存せしめたりとて、もしそれだけの埋合せとして新領土の開拓に努むる処あらば、一国全体の商工業より見て、さしたる損害を来す訳でもあるまい。眼前の利にのみ齷齪あくせくして世界に二つとない自国の宝の値踏ねづみをする暇いとまさえないとはい、あまりに小国しょうこく人の面目を活躍させ過ぎた話である。思わず畠違いへ例の口癖とはいながら愚痴が廻り過ぎた。世の中はどうでも勝手に棕櫚しゅろぼうき箒。私は自分勝手に唯一人ひよりげた日和下駄ひを曳ひきずりながら黙ひつて裏町を歩いていればよかつたのだ。議論はよそう。皆様が御退屈だから。



## 第六 水 附渡船

フランスじん  
 仏蘭西人エミル・マンユの著書『都市美論』の興味ある事は既  
 にわが随筆『大窪おおくぼだより』の中うちに述べて置いた。エミル・マン  
 ユは都市に対する水の美を論ずる一章において、広く世界各国の  
 都市とその河流及び江湾の審美的関係より、更に進んで運河しやう沼う  
たく沢噴水橋きやうりやう梁等さいせつの細節にわたってこれを説き、なおその足  
 らざる処を補わんがために水流に映ずる市街燈火の美を論じてい  
 る。

こころみ今試に東京の市街と水との審美的関係を考うるに、水は江戸時

代より継続して今日こんにちにおいても東京の美観を保つ最も貴重なる  
 要素となつている。陸路運輸の便べんを欠いていた江戸時代にあつて  
 は、天然の河流たる隅田川すみだがわとこれに通ずる幾筋の運河とは、い  
 うまでもなく江戸商業の生命であつたが、それと共に都会の住民  
 に対しては春秋四季の娯樂を与え、時に不朽の価値ある詩歌しうか絵画  
 をつくらしめた。しかるに東京の今日市内の水流は単に運輸のた  
 めのみとなり、全く伝来の審美的価値を失うに至つた。隅田川は  
 いうに及ばず神田のお茶の水本所ほんじよの豎川たてかわを始め市中しちゆうの水流  
 は、最早もはや現代のわれわれには昔の人が船宿ふなやどの棧橋さんぼしから猪  
 牙船ぶねに乗つて山谷さんやに通い柳島やなぎしまに遊び深川ふかがわに戯たわむれたような  
 風流を許さず、また釣や網の娯樂をも与えなくなつた。今日の隅

田川は巴里パリにおけるセーヌ河の如き美麗なる感情を催さしめず、  
 また紐ニューヨーク育のホドソン、倫敦ロンドンのテエムスに対するが如く偉大  
 なる富国ふこくの壯觀をも想像させない。東京市の河流はその江灣なる  
 品川しながわの入海いりうみと共に、さして美しくもなく大きくもなくまたさ  
 ほどに繁華でもなく、誠に何方どっちつかずの極めてつまらない景色を  
 なすに過ぎない。しかしそれにもかかわらず東京市中の散歩にお  
 いて、今日なお比較的興味あるものはやはり水流れ船動き橋かか  
 る処の景色である。

東京の水を論ずるに当つてまずこれを區別して見るに、第一は  
 品川の海湾、第二は隅田川なかがわ中川ろくごうがわ六郷川の如き天然の河流、第  
 三は小石川の江戸川、神田の神田川、王子の音無川おとなしがわの如き細さいり

流ゆう、第四は本所深川日本橋きょうばし京橋きやうばし下谷したや浅草あさくさ等市中繁華の町  
 に通ずる純然たる運河、第五は芝の桜川さくらがわ、根津の藍染川あいそめがわ、  
 麻布の古川ふるかわ、下谷の忍川しのぶがわの如きその名のみ美しき溝渠こうきよ、  
 もしくは下水、第六は江戸城を取巻く幾重いくえの濠ほり、第七は不忍しのぶずのい  
 池け、角筈つのはず十二社じゆうにそうの如き池である。井戸は江戸時代にあつて  
 は三宅坂側みやけざかそばの桜ヶ井さくらい、清水谷しみずだにの柳やなぎの井い、湯島の天神てんじんの御福おふく  
 の井いの如き、古来江戸名所の中に数えられたものが多かったが、  
 東京になつてから全く世人に忘れられ所在の地さえ大抵は不明と  
 なつた。

東京市はかくの如く海と河と堀みぞと溝みぞと、仔細しさいに観察きたし来ればそ  
 れら幾種類の水——即ち流れ動く水と淀よどんで動かぬ死したる水と

を有するすこぶる頗變化に富んだ都会である。まず品川のいりうみ入海を眺めんにここは目下なお築港の大工事中であれば、将来如何なる光景を呈し来るや今より予想する事はできない。今日までわれわれが年久しく見馴れて来た品川の海は僅にわずか房州ぼうしゅうがよい通の蒸気船と円まるツだるませんこい達磨船を曳ひきうごか動す曳船の往来する外ほか、東京なる大都會の繁榮とは直接にさしたる関係もない泥海どろうみである。潮しおの引く時泥で土いどは目のとどく限り引続いて、岸近くには古下駄すみだわらに炭すみ俵たわら、さては皿小鉢や椀のかけらに船ふなむし虫のうようよと這寄はいよるばかり。この汚い溝どぶのような沼地を掘返しながら折々は沙蚕取りが手桶ておけを下げて沙蚕を取っている事がある。遠くの沖には彼方かなた此方こなたに濔みおや粗そ朶だが突立つたっているが、これさえ岸より眺むれば塵ちりあくた芥かかと思わ

れ、その間にあいだうか泛ぶ牡蠣舟やのりとり苔取のこぶね小舟も今は唯強しいて江戸の昔  
 を追ついかい回しようとする人の眼にのみ聊いささかの風趣を覚えさせるばかりである。かく現代の首府に対しては實用にも裝飾にも何にもな  
 らぬこの無用なる品川湾の眺望は、彼かの八ツ山やまの沖おきに並んで泛ぶ  
 これも無用なる御台場おだいばと相俟あいまつて、いかにも過去つた時代の遺物  
 らしく放棄された悲しい趣を示している。天氣のよい時しらほ白帆や浮う  
きぐも雲と共に望み得られる安房あわかずさ上総さんえいの山影とても、最早もはや今日の  
 都会人かには彼のはなかわどすけろく花川戸助六せりふが台詞にも読込まれているような爽  
 快な心持を起させはしない。品川湾の眺望に対する興味は時勢と  
 共に全く湮いんめつ滅してしまつたにかかわらず、その代りとして興る  
 べき新しい風景に対する興味は今日においてはいまだ成立たずに

いるのである。

芝浦しばうらの月見も高輪たかなわの二十六夜待にじゅうろくやまちも既になき世の語かたりぐさ草

である。南品なんびんの風流を伝えた楼台ろうだいも今は唯不潔ただなる娼家しょうかに

過ぎぬ。明治二十七、八年頃江見水蔭子えみすいいんしがこの地の娼婦を材料と

して描いた小説『泥水清水どろみずしみず』の一篇は当時硯友社けんゆうしゃの文壇に傑

作として批評されたものであつたが、今よりして回想すれば、こ

れすら既に遠い世のさまを描いた物語のような気がしてならぬ。

かく品川の景色の見捨てられてしまつたのに反して、荷船の帆

柱と工場の煙筒の叢むらり立つた大川口おおかわぐちの光景は、折々西洋の漫画

に見るような一種の趣味に照して、この後ごとも案外長く或一派あるの

詩人よろこを悦ばす事が出来るかも知れぬ。木下杢太郎きのしたもくたろう 北原白秋きはらはくしゅう

諸家の或時期の詩篇には築地の旧居留地から つきしまえいたいばし 月島永代橋 あたりの生活及びその風景によつて感興を発したらしく思われるものが すくな 尠くなかつた。全く石川島 いしかわじま の工場を うしろ 後にして幾艘となく帆柱を連ねて碇泊 ていはく するさまざまな日本風の荷船や西洋形の帆前船 ほまえせん を見ればおのずと特種の詩情が もよお 催される。私は永代橋を渡る時活動するこの河 かわぐち 口の光景に接するやドオデエがセエン河を往復する荷船の生活を描いた かれん 可憐なる彼の『ラ・ニベルネエズ』の一篇を思出すのである。今日の永代橋には最早や辰巳 たつみ の昔を回想せしむべき何物もない。さるが故に、私は永代橋の鉄橋をばかえつてかの あずまばし 吾妻橋や りようごくばし 両国橋の如くに醜 みに くいとは思わない。新しい鉄の橋はよく新しい河口 かこう の風景に一致している。



私が十五、六歳の頃であつた。永代橋の河下かわしもには旧幕府の軍艦が一艘商船学校の練習船として立腐れたちくさのままに繋がれていた時分、同級の中学生といつものように浅草橋あさくさばしの船宿から小舟こぶねを借りてこの辺へんを漕ぎ廻り、河かわ中なかに碇泊している帆前船を見物して、こわい顔した船長から椰子やしの実を沢山貰つて帰つて来た事がある。その折私たちは船長がこの小さな帆前船あやつを操つて遠く南洋まで航海するのだという話を聞き、全くロビンソンの冒険談を読むような感に打たれ、将来自分たちもどうかしてあのような勇猛なる航海者になりたいと思つた事があつた。

やはりその時分の話である。築地つぎじの河岸かしの船宿から四挺しちようろ艦の

ボオトを借りて遠く千住せんじゆの方まで漕ぎ上つた帰り引汐ひきしおにつれて佃つくだ島じまの手前まで下つて来た時、突然向から帆を上げて進んで来る大きな高瀬船たかせぶねに衝突し、幸いに一人も怪我けがはしなかつたけれど、借りたボオトの小舷こべりをば散々に破こわしてしまつた上に櫂かいを一本折つてしまつた。一同は皆親がかりのものばかり、船遊びをする事も家うちへは秘密にしていた位なので、私たちは船宿へ歸つて万一破損の弁償金を請求されたらどうしようかとその善後策を講ずるために、佃島の砂の上にボオトを引上げ浸水をかい出しながら相談をした。その結果夜暗くなつてから船宿の棧橋へ船を着け、宿の亭主が舷ふなべりの大破損に氣のつかない中うち一同いちもくさん目散に逃げ出すがよかろうという事になつた。一同はお浜御殿はまごてんの石垣下まで漕こ

入<sup>ぎい</sup>つてから空腹を我慢しつつ水の上の全く暗くなるのを待ち船宿の棧橋へ上<sup>あが</sup>るが否や、店に預けて置いた手荷物を奪うように引<sup>ひつつ</sup>搦<sup>か</sup>み、めいめい後<sup>あと</sup>をも見ず、ひた走りに銀座の大通りまで走つて、漸<sup>やっ</sup>と息をついた事があつた。その頃には東京府府立の中学校が築地にあつたのでその辺<sup>へん</sup>の船宿では釣船の外にボオトをも貸したのである。今日築地の河岸を散歩しても私ははつきりとその船宿の何処<sup>いずこ</sup>にあつたかを確めることが出来ない。わずか二十年前<sup>ぜん</sup>なる我が少年時代の記憶の跡すら既にかくの如くである。東京市街の急激なる変化はむしろ驚<sup>ほか</sup>くの外はない。

おおかわすじ  
大川筋 一帯の風景について、その最も興味ある部分は今述べ

たように、えいたいばしかこう永代橋河口の眺望を第一とする。吾妻橋あずまばし 両国橋りょうごくばし

等の眺望は今日の処あまりに不整頓にして永代橋におけるが如く

感興を一所に集注する事が出来ない。これを例するに浅野セメンあさの

ト会社の工場と新大橋しんおおはしの向に残る古い火見櫓ひのみやぐらの如き、あるいは

は浅草蔵前あさくさくらまえの電燈会社と駒形堂こまがたどうの如き、国技館こくぎかんと回向

院んの如き、あるいは橋場はしばの瓦斯ガスと真崎まつさき稲荷いなりの老樹の如

き、それら工業的近世の光景と江戸名所の悲しき遺蹟とは、いず

れも個々別々に私の感想を錯乱させるばかりである。されば私は

かくの如く過去と現在、即ち廢頽と進歩との現象のあまりに甚し

く混雜している今日の大川筋よりも、深川ふかがわ小名木川おなぎがわより猿江さるえうら裏

の如くあたりは全く工場地に変形し江戸名所なごりの名残も容易たやすくは尋

ねられぬほどになった処を選ぶ。大川筋はせんじゆ千住より両国に至るまで今日においてはまだまだまだ工業の侵略がかんまん緩漫に過ぎている。ほんじよこうめ本所小梅からおしあげへん押上辺に至る辺も同じ事、新しい工場町としてこれを眺めようとすると、今となつてはかえつてやなぎしま柳島のみようけんどう妙見堂と料理屋の橋はしもと本とが目ざわりである。

運河の眺望は深川の小名木川辺に限らず、いずこにおいても隅田川の兩岸に対するよりも一体にまとまつた感興を起させる。一例を挙げればなかず中洲とはこぎきちよう箱崎町でばなの出端との間に深く突入つきいつて掘割はこれを箱崎町のえいきゆうばし永久橋またはまたはしやうぶがし菖蒲河岸のおんなばし女橋から眺めやるに水はあたかも入江の如く無数の荷船は部落の観をなし

薄暮風収まる時きそ競きそつて炊すい烟えんを棚たな曳ひかすさま正まさに江こう南なん沢たく国こくの  
 趣きをなす。凡すべて溝こう渠きよ運きよ河よの眺望たうぼうの最もも変化へんげんに富とみみかつ活かつ氣きを帯  
 びる処ところは、この中ちゆう洲しゆうの水みづのようように彼かなた方こなた此こなた方かなたから幾いく筋すぢの細こい流ながれが  
 やや広ひろい堀ほり割わりを中ちゆう心しんにして一いっ個こ所ところに落お合あつて来きる処ところ、もしくは深  
 川かわの扇おうぎ橋ばしの如ごとく、長ながい堀ほり割わりが互たがひに交まじり合あつて十じゆう字じ形がたをなす処ところで  
 ある。本ほん所ところ柳やなぎ原はらの新しん辻つじ橋ばし、京きやう橋ばし八はち丁ぢやう堀ほりの白しろ魚うお橋ばし、  
 霊れい岸がん島しまの霊れい岸がん橋ばしあたるの眺なが望ぼうは堀ほり割わりの水みづのあるいは分われある  
 いは合あつがつする処ところ、橋はしは橋はしに接あし、流ながれは流ながれと相あいいげげし、ややとも  
 すれば船ふねは船ふねに突つ当あらうとしていいる。私わたしはかかかる風かぜ景けいの中ちゆう日にっ本ほん橋ばし  
 を背せにして江かう戸こ橋ばしの上うへより菱ひしがた形がたをなした広ひろい水みづの片かた側かわには荒あ  
 布らふ橋ばしつづいて思し案あん橋ばし、片かた側かわには鏡よろい橋ばしをを見みる眺なが望ぼうををば、そ

の沿岸の商家倉庫及び街上橋頭の繁華雑沓と合せて、東京市内の堀割の中にて最も偉大なる壯觀を呈する処となす。殊に歳暮の夜景の如き橋上を往来する車の灯は沿岸の燈火と相乱れて徹宵水の上に揺き動く有様銀座街頭の燈火より遙に美麗である。

堀割の岸には処々に物揚場がある。市中の生活に興味を持つものには物揚場の光景もまたしばし杖を留むるに足りる。夏の炎天神田の鎌倉河岸、牛込揚場の河岸などを通れば、荷車の馬は馬方と共につかれて、河添の大きな柳の木の下に居眠りをしてゐる。砂利や瓦や川土を積み上げた物蔭にはきまつて牛飯やすいとんの露店が出ている。時には氷屋も荷を卸して

る。荷車の後押しをする車力しやりきの女房は男と同じような身仕度をして立ち働き、その赤児あかごをば捨児すてごのように砂の上に投出して、と、その辺へんには瘦やせた鶏けいが落ちこぼれた餌えさをもりつくして、馬の尻ぼくから馬糞ぼんの落ちるのを待っている。私はこれらの光景に接すると、必かならず北斎あるいはミレエを連想して深刻なる絵画的写実の感興いざなを誘いざない出され、自みづから絵事かいじの心得なき事を悲しむのである。

以上河流かりゆうと運河の外なお東京の水の美に関しては何々々の下水が落合みぞかわつて次第に川の如き流をなす溝川の光景を尋ねて見なければならぬ。東京の溝川には折々おほか可笑おかしいほど事実と相違しした美しい名がつけられてある。例えば芝しば愛宕あたご下したなる青松寺せいしようじの前



を流れる下水を昔から桜川さくらがわと呼びまた今日では全く埋尽うずめつく  
 された神田鍛冶町かじちようの下水を逢初川あいそめがわ、橋場総泉寺はしばそうせんじの裏手から  
 真崎まつさきへ出る溝川おもいがわを思川おもいがわ、また小石川こいしかわ金剛寺坂下こんごうじざかしたの下水  
 を人參川にんじんがわと呼ぶ類たぐいである。江戸時代にあつてはこれらの溝川も  
 寺院の門前や大名屋敷の堀外へいそとなど、幾分か人の目につく場所を  
 流れていたような事から、土地の人にはその名の示すが如き特殊  
 の感情を与えたものかも知れない。しかし今日の東京になつては  
 下水を呼んで川となすことすら既に滑稽なほど大袈裟おおげさである。か  
 くの如くその名とその実との相あいともな伴なわざる事は独り下水の流れ  
 のみには留まらない。江戸時代とまたその以前からの伝説を継承  
 した東京市中各処の地名には少しく低い土地には千仞せんじんの幽谷を

見るように地獄谷麴町じごくだににあり千日谷四谷鮫ヶ橋せんいちだににあり我善がぜんほ  
 坊ヶ谷麻布うだににありなぞという名がつけられ、また少しく小高い処こだか  
 は直ちに峨々ががたる山岳の如く、愛宕山道あたごやま灌山待乳山どうかんやまなぞと  
 呼ばれている。島なき場所も柳島やなぎしま三河島みかわしま向島むこうしまなぞと呼  
 ばれ、森なき処にも鳥からすもり森さぎもり、鷺の森の如き名称が残されてある。  
 始めて東京へ出て来た地方の人は、電車の乗換場のりかえばを間違えたり  
 市中の道に迷つたりした腹はらだち立まぎれ、かかる地名の虚偽を以て  
 これまた都会の憎むべき悪風として観察するかも知れない。

溝川は元より下水に過ぎない。『紫の一むらさき本ひともと』にも芝の宇田川うだがわ  
 を説く条くだりに、「溜池ためいけの屋舗やしきの下水落ちて愛宕あたごの下より増上寺ぞうじょうじ

の裏門を流れて爰こゝに落る。愛宕の下、屋敷々々の下水も落ち込む  
 故宇田川橋うだがわばしにては少しの川のやうに見ゆれども水みなかみ上はかくの如  
 し。「とある通り、昔から江戸の市中には下水の落合つて川をな  
 すものが少くなかつた。下水の落合つて川となつた流れは道に沿  
 い坂の麓ふもとを廻り流れ流れて行く中うちに段々広くなつて、天然の河流  
 または海に落込むあたりになるとどうやらこうやら伝馬船てんませんを通  
 わせる位になる。麻布あさぶの古川ふるかわは芝山内しばさんないの裏手近くその名も赤  
 かばねがわ  
 羽川そびと名付けられるようになると、山内の樹木と五重塔ごじゅうとうの  
 聳そびゆる麓を巡つて舟楫しゅうしゅうの便を与うるのみか、紅葉こうようの頃は四  
 条派うはの絵にあるような景色を見せる。王子おうじの音無川おとなしがわも三河みかわしま  
 島の野を潤うるおしたその末は山谷堀さんやぼりとなつて同じく船を泛うかべる。

下水と溝川はその上に架つた汚い木橋や、崩れた寺の塀、枯れかかつた生垣いけがき、または貧しい人家の様と相對して、しばしば憂鬱なる裏町の光景を組織する。即ち小石川柳町の小流こながれの如き、本郷なる本妙寺坂下の溝川の如き、団子坂下から根津に通ずる藍染川の如き、かかる溝川流るる裏町は大雨の降る折といえば必ず雨潦うりようの氾濫に災害を被る處である。溝川が貧民窟に調和する光景の中、その最も悲惨なる一例を挙げれば麻布の古川橋から三之橋さんのほしに至る間の川筋であろう。ぶりき板の破片や腐つた屋根板で葺いたあばら家は数町に渡つて、左右から濁水いさしはぎを挟んで互にその傾いた廂ひさしを向い合せている。春秋時候はるあきの変わり目に降りつづく大雨の度たびごとに、芝しばと麻布の高台から滝のよ

うに落ちて来る濁水は忽ち兩岸に氾濫して、あばら家の腐った土台からやがては破れた畳<sup>たたみ</sup>までを浸<sup>ひた</sup>してしまふ。雨が霽<sup>は</sup>れると水に濡れた家具や夜具蒲団<sup>やぐふとん</sup>を初め、何とも知れぬ汚<sup>きたな</sup>らしい檻<sup>ぼろ</sup>褌の数々は旗<sup>のぼり</sup>か幟<sup>のぼり</sup>のように兩岸の屋根や窓の上に曝<sup>さら</sup>し出される。そして眞黒な裸体の男や、腰巻一つの汚い女房や、または子供を背負つた児<sup>こむすめ</sup>娘<sup>め</sup>までが笊<sup>ざる</sup>や籠<sup>かご</sup>や桶<sup>おけ</sup>を持つて濁流の中<sup>うち</sup>に入りつ乱れつ富裕な屋敷の池から流れて来る雑魚<sup>ざご</sup>を捕えようと急<sup>あせ</sup>つてゐる有様、通りがかりの橋の上から眺めやると、雨あがりの晴れた空と日光<sup>もと</sup>の下に、或時はかえつて一種の壯觀を呈している事がある。かかる場合に看取せられる壯觀は、丁度軍隊の整列もしくは舞台における並<sup>ならび</sup>大<sup>だい</sup>名<sup>み</sup>を見る時と同様で一つ一つに離して見れば極めて平

凡なものも集合して一団をなす時には、此処ここに思いがけない美麗と威厳とが形造られる。古川ふるかわ橋から眺める大雨の後の貧家あつの光景の如きもやはりこの一例であろう。

江戸城の濠ほりはけだし水の美の冠たるもの。しかしこの事は叙述の筆を以てするよりもむしろ絵画の技ぎを以てするに如しくはない。それ故私は唯代だいかんちよう官町の蓮池御門、三宅坂下の桜田御門、九段坂下の牛ヶ淵等古来人の称美する場所の名を挙げるに留とどめて置く。

池には古来より不忍池しのばずのいけの勝景ある事これも今更説く必要がない。私は毎年の秋竹たけの台だいに開かれる絵画展覧会を見ての帰り道、

いつも市氣満々たる出品の絵画よりも、向ヶ岡の夕陽敗荷の池に反映する天然の絵画に対して杖を留むるを常とした。そして現代美術の品評よりも独り離れて自然の画趣に恍惚とする方が遙に平和幸福である事を知るのである。

不忍池は今日市中に残された池の中の最後のものである。江戸の名所に数えられた鏡ヶ池や姥ヶ池は今更尋る由もない。浅草寺境内の弁天山の池も既に町家となり、また赤坂の溜池も跡方なく埋めつくされた。それによつて私は将来不忍池もまた同様の運命に陥りはせぬかと危むのである。老樹鬱蒼として生茂る山王の勝地は、その翠緑を反映せしむべき麓の溜池あつて初めて完全なる山水の妙趣を示すのである。もし上野の

山より不忍池の水を奪つてしまつたなら、それはあたかも両腕をもぎ取られた人形に等しいものとなるであらう。都会は繁華となるに従つて益々自然の地勢から生ずる風景の美を大切に保護せねばならぬ。都会における自然の風景はその都市に対して金力を以て造る事つくの出来ぬ威厳と品格とを帯おびさせるものである。パリパリにもロンドンロンドンにもあんな大きな、そしてあのように香かんばばしい蓮はすの花の咲く池は見られまい。

都会の水に関して最後に 渡わた船しづねの事を一言いちごんしたい。渡船は東京の都市が漸次整理ぜんじされて行くにつれて、即ち橋梁の便宜を得るに従つてやがては廃絶すべきものであらう。江戸時代に溯さかのつて



これを見れば元禄九年に永代橋えいたいばしが懸かかつて、大渡おおわたしと呼ばれた  
 おおかわぐち わたしは  
 大川口の渡場は『江戸鹿子』や『江戸爵えどすずめ』などの古書にそ  
 の跡を残すばかりとなつた。それと同じように御厩河岸おうまやがしの渡しわたよろい鎧  
 わたし  
 の渡を始めとして市中諸所の渡場は、明治の初年架橋工事の竣しゆん  
 成せいと共にいずれも跡を絶ち今はただ浮世絵によつて当時の光景  
 うかが  
 を窺うばかりである。

しかし渡場はいまだ悉く東京市中からその跡を絶つた訳ではな  
 い。両国橋を間にしてその川上に富士見ふじみの渡しわたし、その川下に安宅あたけの  
 渡が残っている。月島つきしまの埋立工事が出来上ると共に、築地つきじの海  
 岸からは新に曳船ひきふねの渡しが出来た。向島むこうしまには人の知る竹屋たけや  
 の渡しがあり、橋場はしばには橋場の渡しがある。本所ほんじよの豎川たてかわ、深ふ

かがわ  
川おなぎがわへんの小名木川辺の川筋にはにたりぶね荷足船で人を渡す小さな渡場が幾  
個所もある。

鉄道の便宜は近世に生れたわれわれの感情から全くきりよ羈旅とよぶ  
純朴なる悲哀の詩情を奪うばいさ去つた如く、橋梁はまた遠からず近世  
の都市より渡船なる古めかしいゆるや緩かな情趣を取除いてしまふであ  
らう。今日世界の都会中渡船なる古雅の趣を保存している処は日  
本の東京のみではあるまいか。米国の都市には汽車を渡す大仕掛  
けの渡船があるけれど、竹屋の渡しの如く、河かわみず水あらいだに洗あら出いだされ  
た木目もくめの美しい木造りきづくの船、櫂かしの艫ろ、竹の棹さおを以てする絵の如き  
渡船はない。私は向島の三みめぐり囲めぐりや白しらひげ髯ひげに新しく橋梁の出来る事  
を決して悲しむ者ではない。私は唯両国橋の有無ゆうむにかかわらずそ

の上かみしも下に今なお渡場が残されてある如く隅田川その他の川筋にいつまでも昔のままの渡船のあらん事を希こいねがうのである。

橋を渡る時欄らんかん干の左右からひろびろした水の流れを見る事を喜ぶものは、更に岸を下くだつて水上に浮かび鷗かもめと共にゆるやかな波に揺ゆられつつ向むこうの岸に達する渡船の愉快を容易に了解する事が出来るであろう。都会の大道には橋梁の便あつて、自由に車を通ずるにかかわらず、殊ことさら更岸に立つて渡船を待つ心は、丁度表通に立派なアスファルト敷じきの道路あるにかかわらず、好んで横町や路地の間かんどう道を抜けて見る面白さとやや似たものである。渡船は自動車や電車に乗って馳はせ廻る東京市民の公こう生しょう涯がいとは多くの関係ふろしきづつを持たない。しかし渡船は時間の消費をいとわず重い風呂敷包

みなぞ背負<sup>せお</sup>つてテクテクと市<sup>しちゆう</sup>中を歩いている者どもには大<sup>だい</sup>なる  
休息を与え、またわれらの如き閑散なる遊歩者に向つては近代の  
生活に味<sup>あじわ</sup>われない官覚の慰安を覚えさせる。

木で造つた渡船と年老いた船頭とは現在並びに将来の東京に対  
して最も尊い骨<sup>こつとう</sup>董の一つである。古樹と寺院と城壁と同じくあ  
くまで保存せしむべき都市の宝<sup>ほうもつ</sup>物である。都市は個人の住宅と  
同じくその時代の生活に適當せしむべく常に改築の要あるは勿論  
のことである。しかしわれわれは人の家を訪<sup>と</sup>うた時、座敷の床<sup>とこ</sup>の  
間にその家伝来の書画を見れば何となく奥<sup>おくゆか</sup>床<sup>おのずか</sup>しく自ら主人に対  
して敬意を深くする。都会もその活動的ならざる他<sup>た</sup>の一面におい  
て極力伝来の古蹟を保存し以てその品位を保<sup>たも</sup>たしめねばならぬ。

この点よりして渡船の如きは独<sup>ひと</sup>りわれら一個の偏狭なる退歩趣味からのみこれを論ずべきものではあるまい。

## 第七 路地

鉄橋と渡船との比較からここに思起されるのは立派な  
 表通の街路に対してその間々に隠れている路地の興味である。

擬造西洋館の商店並び立つ表通は丁度電車の往来する鉄橋の趣に  
 等しい。それに反して日陰の薄暗い路地はあたかも渡船の物

哀にして情味の深きに似ている。式亭三馬が戯作『浮世床』  
 の挿絵に歌川国直が路地口のさまを描いた図がある。歌川豊

国はその時代享和二年のあらゆる階級の女の風俗を描いた絵本  
 『時勢粧』の中に路地の有様を写している。路地はそれらの

浮世絵に見る如く今も昔と変りなく細民さいみんの棲息する処、日の当  
 った表通からは見る事の出来ない種々さまざまなる生活ひそが潜みかくれて  
 いる。佗住居わびずまいの果敢はかなさもある。隠棲の平和もある。失敗と挫折  
 と窮迫との最終の報酬なる怠惰と無責任との楽境らくきようもある。す  
 いた同士の新世帯しんしよたいもあれば命掛けなる密通の冒険もある。され  
 ば路地は細く短しといえども趣味と変化に富むことあたかも長編  
 の小説の如しといわれるであろう。

今日東京の表通は銀座より日本橋にほんばしどおり通は勿論上野の広小路ひろこうじ  
 浅草の駒形こまがたどおり通を始めとして到処いたるところ西洋まがいの建築物とペ  
 ンキ塗の看板や瘦せ衰えた並樹なみきさては処嫌わず無遠慮に突立ってい  
 る電柱とまた目まぐるしい電線の網目のために、いうまでもな

く静寂の美を保っていた江戸市街の整頓を失い、しかもなおいまだ音律的なる活動の美を有する西洋市街の列に加わる事も出来ない。さればこの中途半端の市街に対しては、風雨雪月夕陽等の助けを借るにあらざれば到底芸術的感興を催す事ができない。表通を歩いて絶えず感ずるこの不快と嫌悪の情とは一層私をしてその陰にかくれた路地の光景に興味を持たせる最大の理由になるのである。

路地はどうかすると横町同様人力車の通れるほど広いものもあれば、土蔵または人家の狭間ひあわいになって人一人やつと通れるかどうかと危あやぶまれるものもある。勿論その住民の階級職業によって路地は種々異った体裁ていさいをなしている。日本橋際にほんばしぎわの木原店きはらだなは軒の



きなみ  
 並飲食店の行燈あんどうが出てゐる処から今だに食傷新道しょくしやうじんみちの名  
 がついでゐる。吾妻橋あずまばしの手前東橋亭とうきやうていとよぶ寄席よせの角かどから花  
なかわど  
 川戸の路地に這入はいれば、ここは芸人や芝居者しばいものまた遊芸の師匠  
 なぞの多い処から何となく猿若町さるわかまちの新道しんみちの昔もかくやと推量  
 せられる。いつも夜店の賑にぎわう八丁堀北島町はつちやうぼりきたじまちやうの路地には片  
 側に講釈の定席じやうせき、片側には娘義太夫むすめぎだゆうの定席が向合つてゐる  
 ので、堂摺連どうするれんの手拍子てびやうしは毎夜張扇はりおうぎの響うちまじわに打交うちまじわる。両  
やうごく  
 国の広小路ひろこうじに沿うて石を敷いた小路には小間物屋袋物屋ふくろものや  
せんべいや  
 煎餅屋など種々なる小売店こうりみせの賑う有様まさ、正しく屋根のない勧か  
んこうば  
 工場の廊下と見られる。横山町よこやまちやうへん辺なかとつのとある路地なの中にはや  
 はり立派に石を敷詰めた両側ともに長門筒ながとつ袋物ふくろものまた筆なぞ

製している問屋とんやばかりが続いているので、路地一帯が倉庫のよう  
 に思われる処があつた。芸者家げいしやの許可された町の路地はいうま  
 でもなく艶なまめかしい限りであるが、私はこの種類うちの中では新橋柳しんばしやなぎ  
 橋ばしの路地よりも新富座裏しんとみざうらの一角をばそのあたりの堀割の夜景  
 とまた芝居小屋の背面を見る様子とから最も趣のあるように思つ  
 ている。路地の最も長くまた最も錯雑して、あたかも迷宮の観あ  
 るは葎よしちよう町よしちようの芸者家町であろう。路地の内に蔵くらづくり造くらづくりの質屋も  
 あれば有徳うとくな人の隠いんたく宅いんたくらしい板塀も見える。わが拙せつさく作小説  
 『すみだ川』の篇中にはかかる路地の或場所をばその頃見たまま  
 に写生して置いた。

路地の光景が常に私をしてかくの如く興味を催さしむるは西洋

銅版画に見るが如きあるいはわが浮世絵に味うが如き平民的画趣ともいふべき一種の芸術的感興もとしづに基くものである。路地を通り抜ける時試こころみに立止つて向うを見れば、此方こなたは差迫る両側の建物に日さえぎを遮られて湿しめつぽく薄暗くなつている間から、彼方かなた遙に表通の一部分だけが路地の幅だけにくつきり限られて、いかにも明るそうに賑にぎやかそうに見えるであらう。殊に表通りの向側に日の光が照渡つてゐる時などは風になびく柳の枝や広告の旗の間に、往來ゆききの人の形が影の如く現れては消えて行く有様、丁度燈火に照された演劇の舞台を見るような思いがする。夜になつて此方は真暗な路地裏から表通の燈火を見るが如きはいわずともまた別べつ樣ようの興趣がある。川添いの町の路地は折々しのびがえ返しをつけたその出口から

遙に河岸通のみならず、併せて橋の欄干や過行く荷船の帆の一部分を望み得させる事がある。かくの如き光景はけだし逸品中の逸品である。

路地はいかに精密なる東京市の地図にも決して明には描き出されてはいない。どこから這入って何処へ抜けられるか、あるいは何処へも抜けられず行止りになっているものか否か、それはけだしその路地に住んで始めて判然するので、一度や二度通り抜けた位では容易に判明すべきものではない。路地には往々江戸時代から伝承し来った古い名称がある。即ち中橋の狩野新道というが如き歴史的由緒あるものも尠くない。しかしそれとてもその土地に住古したものとの間にのみ通用されべき名前であつて、東京

市の市政が認めて以て公の町名となしたものは恐らくは一つもあるまい。路地は即ちあくまで平民の間にのみ存在し了解されているのである。犬や猫が垣の破れや塀の隙間を見出して自然とその種属ばかりに限られた通路を作ると同じように、表通りに門戸を張ることの出来ぬ平民は大道と大道との間に自ら彼らの棲息に適當した路地を作ったのだ。路地は公然市政によって經營されたものではない。都市の面目裁品格とは全然關係なき別天地である。されば貴人の馬車富豪の自動車の地響に午睡の夢を驚かさるる恐れなく、夏の夕は格子戸の外に裸体で涼む自由があり、冬の夜は置炬燵に隣家の三味線を聞く面白さがある。新聞買わずとも世間の噂は金棒引の女房によって仔細に伝えられ、喘息

持もちの隠居が咳嗽せきは頼まざるに夜通し泥棒の用心となる。かくの  
 如く路地は一種いいがたき生活の悲哀うちの中に自からまた深刻なる  
 滑稽の情趣を伴わせた小説的世界である。しかして凡すべてこの世界  
 のあくまで下世げせ話なる感情と生活とはまたこの世界を構成する格こ  
 子戸うしど、溝板どぶいた、物干台ものほしだい、木戸口きどぐち、忍返しのびがえしなぞいう道具どうぐ立と一致  
 している。この点よりして路地はまた渾然こんぜんたる芸術的調和の世  
 界といわねばならぬ。

## 第八 閑地

市中しちゆうの散歩に際して丁度前章に述べた路地と同じような興味を感じしむるものが最もう一つある。それは閑地あきちである。市中繁華なる街路の間に夕顔ひるがお昼顔ひるがお露草車前草おおぼこなぞいう雑草の花を見る閑地である。

閑地は元よりその時と場所とを限らず偶然に出来るもの故われわれは市内の如何なる処に如何なる閑地があるかは地面師じめんしならぬ限りあらかじ予めこれを知る事が出来ない。唯ただその場に通たりかかつて始めてこれを見るのみである。しかし閑地は強しいて捜し歩かずとも市

中いた到るところにある。今まで久しく草の生えていた閑地が地ならしされてやがて普請ふしんが始まるかと思えば、いつの間にかその隣の家うちが取払われて、或場合あるには火事で焼けたりして爰ここに別の閑地ができる。そして一ひと雨降ればすぐに雑草が芽を吹きやがて花を咲かせ、忽ちにして蝶々ちようちよう蜻蛉とんぼやきりぎりすの飛んだり躍はねたりする野原になつてしまうと、外そと圃がこいはあつてもないと同然、通り抜ける人たちの下駄の齒こみちに縦横に踏開かれ、昼は子供の遊あそび場、夜は男女が密会の場所となる。夏の夜に処の若い者が素し人相撲ろうとずを催すのも閑地があるためである。

市中繁華な町の倉と倉との間、または荷船の込こみ合あう堀割近くに  
ある閑地には、今も昔と変りなく折々紺屋こうやの干場ほしばまたは元結もとゆいの



糸繰場いとくりばなぞになつてゐる処がある。それらの光景は私の眼には  
 直ただちに北齋ほくさいの画題おもしろいを思おも起いさせる。いつぞや芝白金しばしろかねの瑞聖ずいしよ  
 寺うじという名高い黄檗宗おうばくしゆうの禅寺を見に行つた時その門前の閑  
 地に一人の男が頻しきりと元結の車を繰つていた。この景色は荒れた寺  
 の門とその辺へんの貧しい人家などに対照して、私は俳人其角きかくが茅  
 場町薬師堂ちやうやくしどうのほとりなる草庵の裏手、蓼たでの花穂はなほに出でたる閑  
 地ぶんしちに、文七ぶんしちというものが元結こぐ車の響をば昼も蝸ひぐらしに聞きまじ  
 えてまた殊更の心地し、

文七にふまるな庭のかたつむり

元結のぬる間はかなし虫の声

大絃たいげんはさらすもとひに落おつる雁かり

なぞと吟ぎんじたる風流の故事を思おもうか浮べたのであつた。この事は晋しん子が俳文集『類柑るいこうじ子』の中北うちの窓と題された一章に書かれてある。『類柑子』は私の愛読する書物の中の一冊である。

私がまだ中学校へ通つている頃までは東京中には広い閑地が諸処方々にあつた。神田かんだ三崎町みさきちようの調練ちようれん場跡ばあとは人殺ひところしや首くびく縊くりの噂で夕暮からは誰一人通るものもない恐しい処であつた。こいしかわとみざか小石川富坂ほうへいこうしようの片側は砲兵工廠ひよけちの火避地ひよけちで、樹木の茂つた間したやの凹地くぼちには溝みぞが小川のように美しく流れていた。下谷したやの佐竹さたけヶ原はら、芝しばの薩摩原さつまつばらの如き旧諸侯の屋敷跡はすっかり町になつてしまつた後でも今だに原の名が残されている。

銀座通に鉄道馬車が通つて、数寄屋橋から幸橋を経て虎の門に至る間の外濠には、まだ昔の石垣がそのままに保存されていた時分、今日の日比谷公園は見通しきれぬほど広々した閑地で、冬枯の雑草に夕陽のさす景色は目のあたり武蔵野を見るようであった。その時分に比すれば大名小路の跡なる丸の内の三菱ヶ原も今は大方赤煉瓦の会社になつてしまつたが、それでもまだ処々に閑地を残している。私は鍛冶橋を渡つて丸の内へ這入る時、いつでも東京府庁の前側にひろがっている閑地を眺めやるのである。何故というにこの閑地には繁茂した雑草の間に池のような広い水潦が幾個所もあつて夕陽の色や青空の雲の影が美しく漂うからである。私は何となくこういう風に打捨てられた荒地

をばかつて南支那<sup>へん</sup>辺にある植民地の市街の裏手、または米国西海岸の新開地の街などで幾度<sup>いくど</sup>も見た事があるような気がする。

桜田見附<sup>さくらだみつけ</sup>

の外にも久しく兵營の跡が閑地のままに残されてい

る。参謀本部下の堀<sup>ほり</sup>端<sup>ばた</sup>

を通りながら眺めると、閑地のやや小高<sup>こだか</sup>

くなっている処に、雑草や野蔦<sup>のづた</sup>に蔽<sup>おほ</sup>われたまま崩れた石垣の残つ

ているのが見える。その石の古びた色とまた石垣の積み方とはお

のずと大名屋敷の立っていた昔を思起させるが、それと共に私は

また霞ヶ関<sup>かすみせき</sup>

の坂に面した一方に今だに一棟<sup>ひとむね</sup>か二棟ほど荒れたま

ま立っている平家<sup>ひらや</sup>の煉瓦造を望むと、御老中<sup>ごろうじゆう</sup>御奉行<sup>ごぶぎよう</sup>などい

代りに新しく参議だの開拓使などという官名が行われた明治初年の

時代に対して、今となつてはかえつて淡く寂しい一種の興味を呼

出されるのである。

明治十年頃 こばやしきよちかおう 小林清親翁

が新しい東京の風景を写生した水彩

画をば、そのまま もくはんずり 木板摺りにした東京名所の図うちの中に外桜田遠景そと

と題して、遠く樹木の間ここの兵營の正面を望んだ処がが描かれて

いる。当時都下の平民が新こに皇城こうじょうの門外に建てられたこの西

洋造を仰ぎ見て、いかなる新奇の念とまた崇拜の情に打れたか。

それらの感情は新しい画工のいわば稚氣ちぎを帯びた新画風と古めか

しい木板摺あいまの技術と相俟あいまつて遺憾なく紙面に躍如としてしている。一

時代の感情を表現し得たる点において小林翁の風景版画は甚だ価

値ある美術といわねばならぬ。既に去きよさい歳きのした木下杢太郎もくたろう氏は『芸

術』第二号において小林翁の風景版画に関する新研究の一端いったんを

漏らされたが、氏は進んで翁の経歴をたずねその芸術について更に詳細なる研究を試みられるとの事である。

小林翁の東京風景画は ふるかわもくあみ 古河黙阿弥の世話狂言「筆屋幸兵衛」

「明石島蔵」などと並んで、明治初年の東京を窺い知るべき あかしのしまぞう 「明石島蔵」

無上の資料である。維新の当時より下くだつて憲法発布に至らんとす

る明治二十年頃までの時代は、今日の吾人よりしてこれを回顧す

れば東京の市街とその風景の変化、風俗人情流行の推移等あらゆる方面にわたつて甚はなはだ興味あるものである。されば滑稽なるわが

日和下駄ひよりげたの散歩は江戸の遺跡と合せてしばしばこの明治初年の東

京を尋ねる事に勉つとめてゐる。しかし小林翁の版物はんものに描かれた新

しい当時の東京も、僅か二、三十年とは経たたぬ中うち、更に更に新し

しい当時の東京も、僅か二、三十年とは経たたぬ中うち、更に更に新し

い第二の東京なるものの発達するに従つて、漸次跡方もなく消滅して行きつつある。明治六年筋違見附を取壊してその石材を以て造つた彼の眼鏡橋はそれと同じような形の浅草橋と共に、今日は皆鉄橋に架け替えられてしまった。大川端なる元柳橋は水際に立つ柳と諸共全く跡方なく取り払われ、百本杭はつまらない石垣に改められた。今日東京市中において小林翁の東京名所絵と参照して僅にその当時の光景を保つものを求めたならば、虎の門に残っている旧工学寮の煉瓦造、九段坂上の燈明台、日本銀行前なる常盤橋その他数箇所<sup>た</sup>に過ぎまい。官衙の建築物の如きも明治当初のままなるものは、桜田外の参謀本部、神田橋内の印刷局、江戸橋際の駅逦局<sup>えきていきよく</sup>なぞ指折り数

えるほどであろう。

閑地のことからまたしても話が妙な方面へそれてしまった。

しかし閑地と古い都会の追想とはさして無関係のものではない。

芝赤羽根しばあかばねの海軍造兵廠かいぐんぞうへいしようの跡は現在何万坪という広い閑地になつてゐる。これは誰も知つてゐる通り有馬侯ありまこうの屋舗跡やしきあとで、

現在かきがらちよう蠣殻町いぢりゆうさいひろしげにある水天宮すいてんぐうは元この邸内にあつたのである。

一立齋いちぢい広重ひろしげの『東都名勝』とうちの中赤羽根の図を見ると柳おの生

茂いしげつた淋しい赤羽根川あかばねがわの堤つつみに沿うて大名屋敷の長屋が遠く立

続づいてゐる。その屋根の上から水天宮へ寄進のぼりの幟なまこかべが幾筋となく

閃ひらめいてゐる様が描かれてゐる。この図中に見る海鼠壁なまこかべの長屋と

朱塗しゆぬりの御守殿門ごしゆでんもんとは去年の春頃までは半なかば崩れかかつたまま

朱塗しゆぬりの御守殿門ごしゆでんもんとは去年の春頃までは半なかば崩れかかつたまま



ながらなお当時の面影おもかげを留めとどめていたが、本年になつて内部に立つ造兵廠の煉瓦造が取払われると共に、今は跡方もなくなつてしまつた。

その時分——今年の五月頃の事である。友人久米君くめから突然有馬の屋敷跡には名高い猫騷動の古塚ふるづかが今だに残っているという事だから尋ねて見たらばと注意されて、私は慶応義塾けいおうぎじゅくの帰りがけ始めて久米君とこの閑地へ日和下駄を踏ふみ入れた。猫塚ねづかの噂うわさは造兵廠が取払いになつて閑地の中にはそろそろ通抜ける人たちの下駄の齒が縦横こみちに小径こみちをつけ始める頃から誰いうとなくいい伝えられ、既にその事は二、三の新聞紙にも記載されていたという事であつた。

私たち二人は三田通みたどおりに沿う外そとがこい 田どぶの溝かちの縁たちどまに立止たちどまつて何  
 処はか這入はいりいい処を見付けようと思つたが、板塀やぶれには少しも破  
 目めがなく溝はまた広くてなかなか飛越せそうにも思われない。  
 見す見す閑地の外を迂廻うかいして赤羽根の川端まで出て見るのも業ごうは  
 腹らだし、そうかといつて通過たうごうぎた酒屋の角まで立戻たふりつて坂を登  
 り閑地の裏手へ廻まわつて見るのも退儀たいぎである。そう思うほどこの閑  
 地は広々としているのである。私たちはやむをえず閑地の一角に  
 恩賜財団済生会おんし さいせいかいとやらしい札を下げた門口もんぐちを見付けて、用事あ  
 り氣に其処そこから構かまえうち内へ這入はいつて見た。構内は往来から見たと  
 同じように寂しんとして、更に番人のいる様子も見えない。私たちは  
 安心してずんずんと赤煉瓦の本家おもやについて迂廻しながらその裏手

へ出てみると、僅か<sup>うえしたふたすじ</sup>上<sup>てつじようこう</sup>下<sup>てつじようこう</sup>二筋の鉄条綱が引張つてあるばかりで、広々した閑地は正面に鬱々として老樹の生茂つた<sup>あたり</sup>辺から一帯に丘陵をなし、その麓<sup>ふもと</sup>には大きな池があつて、男や子供が大勢釣竿を持ってわいわい騒いでいる意外な景気に興味百倍して、久米君は手早く<sup>なつばおり</sup>夏羽織<sup>すそたもと</sup>の裾と袂をからげるや否や身軽く鉄条綱の間をくぐつて向<sup>むこう</sup>へ出てしまった。私は生憎<sup>あいにく</sup>その日は学校の図書館から借出した重い書物の包を抱えていた上に、片手には例の<sup>こうもりがさ</sup>蝙蝠傘<sup>あひじ</sup>を持っていた。そればかりでない。私の穿<sup>は</sup>いていた藍<sup>あゐじ</sup>縞<sup>ま</sup>仙<sup>ま</sup>台<sup>せい</sup>平<sup>へい</sup>の夏<sup>なつばかま</sup>袴<sup>はかま</sup>は死んだ父親の形見でいかほど胸<sup>むな</sup>高<sup>たか</sup>に締<sup>し</sup>めてもとかくずるずると尻<sup>しりさ</sup>下<sup>か</sup>りに引摺<sup>ひきず</sup>つて来る。久米君は見<sup>み</sup>兼ねて鉄条綱の向から重い書物の包と蝙蝠傘とを受取つてくれた

ので、私は日和下駄の鼻緒はなおを踏ふめ、紬つむぎの一重羽織ひとえぼりの裾を高く巻上げ、きつと夏袴ももだちの股立ももだちを取ると、図抜せいけて丈の高  
い身の有難さ、何の苦もなく鉄条綱をば上から一跨ひとまたぎに跨またいで  
しまった。

二人は早速閑地あきちの草原を横切つて、大勢釣おおぜいする人の集つてい  
る古池なぎせの渚なぎせへと急いだ。池はその後に聳そびゆる崖の高さと、また水  
面に枝を垂した老樹や岩石の配置から考えて、その昔ここに久留く  
米め二十余万石の城主やかたの館やかたが築かれていた時分には、現在水の漂ただよつ  
ている面積よりも確にその二、三倍広かつたらしく、また崖の中  
腹からは見事な滝が落ちていたらしく思われる。私は今まで書物  
や絵で見ていた江戸時代の数ある名園の有様をば臆おぼろげ気ろげながら心

のうちに描出えがきだした。それと共に、われわれの生れ出た明治時代の文明なるものは、実にこれらの美術をば惜おしげ気もなく破壊して兵營や兵器の製造場せいぞうばにしてしまったような英断壮挙の結果によつて成つたものである事を、今更いまさらの如くつくづくと思知るのであつた。

池のまわりは浅草公園の釣堀も及ばぬ賑にぎやかさである。鱒どじょうと鮒ふなと時には大きな鰻うなぎが釣れるという事だ。私たちは水際みずぎわを廻つて崖の方へ通ずる小径こみちを攀登よじのぼつて行くと、大木の根方ねがたに爺じいが一人腰をかけて釣道具に駄菓子やパンなどを売っている。機を見るに敏なるこの親爺おやじの商法にさすがのわれわれも聊いささかか敬服して、その前に立止つたついで、猫塚ねこかの所在を尋ねると、爺おやじさんは既に案内者然

たる調子で、崖の彼方かなたなる森蔭の小徑を教え、なお猫塚といつても今は僅にかけた石の台を残すばかりだという事まで委くわしく話してくれた。

名所古蹟は何処いずくに限らず行つて見れば大抵こんなものかと思うようなつまらぬものである。唯ただその処まで尋ね到る間の道筋や周囲の光景及びそれに附随する感情等によつて他日話の種となすに足るべき興味が繋つながれるのである。有馬の猫塚は釣道具を売つてゐる爺さんが話したよりも、来て見れば更につまらない石のかけらに過ぎなかつた。果してそれが猫塚の台だいいし石であつたか否かも甚だ不明な位であつた。私たちは旧造兵廠の建物の一部をば眼下に低く見下みおろす崖地がけちの一角に、昼なお暗く天を蔽うた老樹の根方ねがたと、

また深く雑草に埋められた崖の中腹に一ツ二ツ落ち転がっている石を見つけたばかりである。しかしここに来るまでの崖の小径と周囲の光景とは遺憾なく私ら二人を喜ばしめた。私は実際今日の東京市中にかくも幽邃なる森林が残されていようとは夢にも思ひ及ばなかった。柳樅檜杉椿なぞの大木に交つて扇骨木八ツ手なぞの庭木さえ多年手入をせぬ処から今は全く野生の林同様七重八重にその枝と幹とを入れちがえている。時節は丁度初夏の五月の事として、これらの樹木はいずれもその枝の撓むほど、重々しく青葉に蔽われている上に、気味の悪い名の知れぬ寄生木が大樹の瘤や幹の股から髪の毛のような長い葉を垂らしていた。遠い電車の響やまた近く崖下で釣する人の立騒ぐ声にも恐れず勢よく囀る小鳥

の声が鋭く梢こげすえから梢こげすえに反響する。私たち二人は雑草の露はかますそに袴はかますその裾うるおを潤うるおしながら、この森蔭おぐらの小暗い片隅から青葉の枝と幹との間すかを透すかして、彼方かなた遙かに広々した閑地の周囲の処しよしよ々に残ねっている練ねりりべい堀の崩れに、夏の日光の殊更明る照渡ちゆうちようっているのを打眺め、何たたずという訳もなく唯惆悵ちゆうちようとして去るに忍びざるが如くいつまでもたたずイんでいた。私たちは既に破壊されてしまった有馬の旧苑ひとたびに対して痛嘆するのではない。一度破壊されたその跡がここに年を経ここうぶて折角荒蕪ここうぶの詩趣に蔽おほわれた閑地ひとたびになつてゐる処をば、更に何らかの新しい計画が近い中にこの森とこの雑草とを取払まえもつつてしまふであらう。私たちはその事を予想して前まへ以て深く嘆息したのである。



私は雑草が好きだ。すみれんぽほ 葶蒲公英のようなはるくさ 春草、ききよう 桔梗、おみなえし 女郎花のような秋草にも劣らず私は雑草を好む。あきち 閑地に繁る雑草、屋根に生ずる雑草、道路のほとり溝の縁どぶに生ずる雑草を愛する。閑地は即ち雑草の花園である。「蚊帳釣草」の穂の練絹ねりぎぬの如くに細く美しき、「猫じやらし」の穂の毛よりも柔き、さては「赤の飯」あかの花の暖そうに薄赤き、「車前草」おおほこの花の爽さわやかに蒼白あおしろき、「蘩」はこべの花の砂よりも小さくして真白ましろなる、一ツ一ツに見来れば雑草にもなかなか捨てがたき可憐かれんなる風情ふぜいがあるではないか。しかしそれらの雑草は和歌にも咏うたわれず、宗達そうだつ光琳こうりんの絵にも描かれなかつた。独り江戸平民の文学なる俳諧と狂歌あつて始めて雑草が

文学の上に取扱われるようになった。私は喜多川歌麿きたがわうたまろの描いた『絵本虫撰むしえらび』を愛して止まざる理由は、この浮世絵師が南宗なんその画家も四条派しじょうはの画家も決して描いた事のない極めて卑俗そうかな草花と昆虫とを写生しているがためである。この一例を以てしても、俳諧と狂歌と浮世絵とは古来わが貴族趣味の芸術が全く閑却ひろいとしていた一方面を拾取ひろいとつて、自由にこれを芸術化せしめた大なる功績を担になうものである。

私は近頃数寄屋橋外すきやばしそとに、虎の門金毘羅こんぴらの社前に、神田聖堂せいどうの裏手に、その他諸処に新設される、公園の樹木を見るよりも、通りがかりの閑地に咲く雑草の花に対して遙にいい知れぬ興味と情趣を覚えるのである。

戸川秋骨君が『そのままの記』に霜の戸山ヶ原とやまはらという一章がある。戸山ヶ原は旧尾州侯御下屋舗びしゅうこうおしもやしきのあつた処、その名高い庭園は荒されて陸軍戸山学校と変じ、附近は広漠たる射的場しやてきばとなつてゐる。この辺豊多摩郡あたりとよたまごおりに属し近き頃まで杜鵑花つつじの名所であつたが、年々人家稠密ちゆうみつしていわゆる郊外の新開町しんかいまちとなつたにかかわらず、射的場のみは今なお依然として原のままである。秋骨君曰くいわ

戸山の原は東京の近郊に珍らしい広開こうかいした地ちである。目白めじろの奥から巢鴨滝すがもたきの川がわへかけての平野は、さらに広い武蔵野むさしのの趣を残したものであろう。しかしその平野は凡て耒耜すべらいしが加え

られている。立派に耕作された畠地<sup>はたち</sup>である。従つて田園の趣はあるが野趣に至つては乏しい。しかるに戸山の原は、原とは言えども多少の高低があり、立樹<sup>たちき</sup>が沢山にある。大きくはないが喬木<sup>きようぼく</sup>が立ち籠めて叢林<sup>そうりん</sup>を為した処もある。そしてその地には少しも人工が加わっていない。全く自然のままである。もし当初の武蔵野の趣を知りたいと願うものは此処<sup>ここ</sup>にそれを求むべきであろう。高低のある広い地は一面に雑草を以て蔽<sup>おほ</sup>われていて、春は摘草<sup>つみくさ</sup>に児女<sup>じじよ</sup>の自由に遊ぶに適し、秋は雅人<sup>がじん</sup>の擅<sup>はし</sup>に散歩するに任<sup>まか</sup>ず。四季の何時<sup>いつ</sup>と言わず、絵画の学生が此処<sup>ここ</sup>其処<sup>そこ</sup>にカンヴァスを携<sup>たず</sup>えて、この自然を写しているのが絶えぬ。まことに自然の一大公園である。最も健全

なる遊覽地である。その自然と野趣とは全く郊外の他の場所  
 に求むべからざるものである。凡そ今日の勢、いやしくも余  
 地あれば其処に建築を起す、然らずともこれに耒耜を加うる  
 に躊躇ちゆうちよしない。然るに如何にして大久保の辺に、かかる  
 殆んど自然そのままの原野が残っているのであるか。不思議  
 な事にはこれが実に俗中の俗なる陸軍の賜である。戸山の原  
 は陸軍の用地である。その一部分は戸山学校の射的場で、一  
 部分は練兵場として用いられている。しかしその大部分は殆  
 んど不用の地であるかの如く、市民もしくは村民の蹂躪じゆうりん  
 するに任してある。騎馬の兵士が大久保柏木かしわぎの小路こみちを隊を  
 なして駆せ廻るのは、甚だ五月蠅いものである。否五月蠅い

ではない癩しやくにさわる。天下の公道をわがもの顔に横領して、  
 意気すこぶ頗る昂あがる如き風ふうあるは、われら平民の甚だ不快とする処  
 である。しかしこの不快を与うるその大機関は、また古いにしえの武  
 蔵野をこの戸山の原に、余らのために保存してくれるもので  
 ある。思えば世の中は不思議に相あい贖あがなうものである。一利  
 一害、今さらながら応報の説が殊に深く感ぜられる。

秋骨君が言う処おおい大にわが意を得たものである。こは直ただちに移して  
 代々木青よよぎあおやま山の練兵場または高田たかたの馬場等ばばに応用する事が出来る。  
 晩秋ゆうひの夕陽を浴びつつ高田の馬場なる黄葉こうようの林さまよに彷徨い、ある  
 いは晴れたる冬の朝青山げんとうの原頭げんとうに雪の富士を望むが如きは、こ  
 れ皆俗中の俗たる陸軍の賜物たまものではないか。

私は慶応義塾に通う電車の道すがら、しなのまちごんだわら 信濃町権田原をへ、青山の大通を横切つて三聯隊裏さんれんたいうらと記しるした赤い棒の立あつてゐる辺りまで、その沿道の大きな建物はことごと尽く陸軍に属するもの、また電車の乗客街上の通行人は兵卒ならざれば士官ばかりという有様に、私はいつも世をあげ挙て悉く陸軍たるが如き感を深くする。それと共に権田原の林に初夏の新緑を望み、三聯隊裏と青山墓地との間の土手や草原に春は若草、秋は芒すすきの穂を眺めて、秋骨君のいわゆる応報の説に同感するのである。

よつやきめ 四谷鮫ヶ橋はしと赤坂離宮との間にこうぶてつどう甲武鉄道の線路をさかい堺にしこうそうて荒草萋々せいせいたる火避地ひよけちがある。初夏の夕暮私は四谷通かみゆの髪いじこ結床へ行つたかえりみち帰途ほうぞうじよこちよまたは買物にでも出た時、法蔵寺横町

う  
だとかあるいは西念寺横町だとか呼ばれた寺の多い横町へ  
曲つて、車の通れぬ急な坂をば鮫ヶ橋谷町へ下り貧家の間を貫  
く一本道をば足の行くがままに自然とかの火避地に出で、ここに  
若葉と雑草と夕栄とを眺めるのである。

この散歩は道程の短い割に頗る変化に富むが上に、また偏狭  
なる我が画興に適する処が尠くない。第一は鮫ヶ橋なる貧民窟の  
地勢である。四谷と赤坂両区の高地に挟まれたこの谷底の貧民窟  
は、堀割と肥料船と製造場とを背景にする水場の貧家に対照し  
て、坂と崖と樹木とを背景にする山の手の貧家の景色を代表する  
ものであろう。四谷の方の坂から見ると、貧家のブリキ屋根は木  
立の間だちに寺院と墓地の裏手を見せた向側の崖下にごたごたと重り



合つてその間から折々汚らしい洗濯物をば風に閃ひらめかしている。初夏の空美しく晴れ崖の雑草に青々とした芽が萌もえ出いで四辺あたりの木立に若葉の緑が滴したたる頃には、眼の下に見下すこの貧民窟のブリキ屋根は一層汚ひとしおらしくこうした人間の生活には草や木が天然から受ける恵みにさえ与あずかれないのかとそぞろ悲惨の色を増すのである。また冬の雨降り濺そそぐ夕暮などには破れた障しょうじ子にうつる燈火の影、鴉鳴からすく墓場の枯木と共に遺憾なく色あせた冬の景色を造り出す。

この暗鬱な一隅から僅に鉄道線路の土手一筋を越えると、その向むこうにはひろびろした火避地を前に控えて、赤坂御所の土塀どべいが乾いぬいの御門ごもんというのを中央なかにして長い坂道をば遠く青山の方へ攀よじ登のぼっている。日頃人ひと通どおりの少ない処とて古風な練塀ねりべいとそれを蔽おほう

樹木とは殊にけだか気高く望まれる。私は火避地のやや御所の方に近く猫柳が四、五本乱れ生じているあたりに、或年の夏の夕暮雨のよ  
うな水音を聞付け、毒虫をも恐れず草を踏み分けながらその方へ  
歩あゆみよ寄つた時、柳の蔭には山の手の高台には思いも掛けない蘆あしの  
茂りが夕風にそよいでいて、井戸のように深くなつた凹味くぼみの底へ  
と、大おおかた方御所から落ちて来るらしい水の流が大きな堰せきにせかれ  
て滝をなしているのを見た。夜になつたらきつと螢ほたるが飛ぶにちが  
いない。私はこの夕ゆうべばかり夏の黄たそがれ昏くれの長くつづく上にも夕月の  
光ある事を憾うらみながら、もと来た鮫ヶ橋の方へと踵きびすを返した。

鮫ヶ橋の貧民窟は一時代よよぎ々木はらの原に万国博覧会が開かれるとか  
いう話のあつた頃、もしそうなつたあかつき暁四谷代々木間の電車の窓か

ら西洋人がこの汚い貧民窟を見下しでもすると国家の耻辱ちじよくになるから東京市はこれを取払ってしまふとやらしい噂があつた。しかし万国博覧会も例の日本人の空景からげいき気で金がない処からおじやんになり、従つて鮫ヶ橋も今日なお取払われず、西念寺さいねんじの急な坂下に依然として剥はげちよろのブリキ屋根を並べている。貧民窟は元より都会の美観を増すものではない。しかし万国博覧会を見物に来る西洋人に見られたからとて何もそれほどに気まりを悪るがるには及ぶまい。当路とうろの役人ほど馬鹿な事を考える人間はない。東京なる都市の体裁、日本なる国家の体面に関するものを挙げたなら貧民窟の取払いよりも先ず市中諸処に立つ銅像の取除とりのけを急ぐが至当であろう。

現在私の知っている東京の閑地あきちは大抵以上のようなものである。わが住む家の門外にもこの両三年市ヶ谷監獄署あと後の閑地がひろがつていたが、今年の春頃から死刑台の跡あとに観音ができあたりは日に々町ちになつて行く、遠からず芸者家げいしややが許可されるとかいう噂うわささえある。

芝浦しばうらの埋立地うめたてちも目下家屋の建たない間は同じく閑地として見るべきものであろう。現在東京市内の閑地の中でこれほど広々とした眺望をなす処は他たにあるまい。夏の夕ゆうべ、海の上に月の昇る頃はひろびろした閑地の雑草は一望煙の如くかすみ渡つて、彼方かなた此方こなたに通ずる堀割から荷船にぶねの帆柱が見える景色なぞまんざら捨て

たものではない。

東京市の土木工事は手をかえ品をかえ、孜孜として東京市の風景を毀損する事に勉めているが、幸にも雑草なるものあつて焼野の如く木一本もない閑地にも緑柔き毛氈を延べ、月の光あつてその上に露の珠の刺繡をする。われら薄倖の詩人は田園においてよりも黄塵の都市において更に深く「自然」の恵みに感謝せねばならぬ。

## 第九 崖

数ある江戸名所案内記中その最も古い方に属する『紫の一本』  
 や『江戸惣鹿子大全』<sup>えどそうがのこたいぜん</sup>などを見ると、坂、山、窪、堀、池、橋  
 などという分類の下に江戸の地理古蹟名所の説明をしている。しか  
 しその分類は例えば谷という処に日比谷、谷中、渋谷、雑司ヶ谷  
 などを編入したように、地理よりも実は地名の文字から来る遊戯  
 的興味に基いた処が尠くない。かくの如きはけだし江戸軽文学の  
 いかなるものにも必ず発見せられるその特徴である。

私は既に期せずして東京の水と路地と、つづいて閑地に対する

興味をばやや分類的に記述したので、ここにもう一つ崖なる文章を付加えて見よう。

崖は閑地や路地と同じようにわが日和下駄ひよりげたの散歩に尠からぬ興味を添えしめるものである。何故なぜというに崖には野篁すすきや芒まじに交つて薊あざみ、藪やぶ枯しを始めありとあらゆる雑草の繁茂した間から場所によると清水が湧いたり、下水したみずが谷川のように潺せん々せんと音して流れたりしている処がある。また落掛るように斜ななめに生えた樹木の幹と枝と殊に根の形なぞに絵画的興趣を覚えさせることが多いからである。もし樹木も雑草も何も生えていないとすれば、東京市中の崖は切立った赤土の夕日を浴びる時なぞ宛然えんぜん堡壘ほうらいを望むが如き悲壯の観を示す。

昔から市内の崖には別にこれという名前をついた処は一つもなかつたようである。『紫の一本』その他の書にも、窪、谷なぞいう分類はあるが崖という一章は設けられていない。しかし高低の甚しい東京の地勢から考えて、崖は昔も今も変りなく市中の諸処そびに聳そびえていたに相違ない。

上野からどうかんやま道灌山あすかやま飛鳥山へかけての高地の側面は崖うちの中で最も偉大なものであろう。神田川を限るお茶の水の絶壁は元より小ようせきへき赤壁の名がある位で、崖の最も絵画的なる实例とすべきものである。

こいしかわかすがまち小石川春日町やなぎちようさすから柳町やちよう指ヶ谷町へかけての低地から、本ほん郷んごうの高たかだい台たいを見る処々ところどころには、電車の開通しない以前、即ち東京



市の地勢と風景とがまだ今日ほどに破壊されない頃には、樹きや草  
 の生おいしげ茂げった崖が現れていた。根津ねづの低地から弥生やよいケ岡おかと千駄木せんだぎ  
 の高地を仰げばここもまた絶壁である。絶壁いただきの頂たきに添きうて、根津  
 権ごんげん現げんの方かたから団子坂だんごさかの上へと通ずる一条の路がある。私は東  
 京中の往来うちの中で、この道ほど興味ある処はないと思つている。  
 片かた側かわは樹と竹藪あやぶに蔽あわれて昼なお暗く、片側はわが歩む道さえ  
 崩れ落ちはせぬかと危あやぶまれるばかり、足あしもと下のぞを覗くと崖の中腹に  
 生えた樹木の梢こずえを透すかして谷底むこうのような低い処にある人家の屋根が  
 小さく見える。されば向むこうは一面さえぎに遮さるものなき大空かぎりもなく  
 広々として、自由に浮雲の定めなき行衛ゆくえをも見極められる。左手  
 には上野谷中うえのやなかに連る森黒く、右手には神田下谷浅草へかけての市

街が一目に見晴され其処そこより起る雑然ちまたたる巷の物音が距離のため  
に柔げられて、かのヴェルレエヌが詩に、

かの平和なる物のひびきは

まち街より来る……

といったような心持を起させる。

当代の碩学せきがくもりおうがい森鷗外先生の居邸きよていはこの道のほとり、団子だんごぎ  
坂かいただきの頂に出ようとすする処にある。二階の欄干らんかん たたずにイむと市中の

屋根を越して遙に海が見えることや、然るが故に先生はこの楼を  
かんちようろう観潮楼と名付けられたのだと私は聞伝えている。団子坂をば

汐見坂という由後に人より聞きたり。度々私はこの観潮楼に親し  
く先生に見ゆるまみの光榮に接しているが多くは夜になってからの事

なので、惜しいかな一度もまだ潮を観る機会がないのである。その代り、私は忘れられぬほど音色の深い上野の鐘を聴いた事があつた。日中はまだ残暑の去りやらぬ初秋の夕暮であつた。先生は大方御食事中でもあつたのか、私は取次の人に案内されたまま暫くの間唯一人この観潮楼の上に取残された。楼はたしか八畳に六畳の二間かと記憶している。一間の床には何かいわれのあるらしい雷という一字を石摺にした大幅がかけてあつて、その下には古い支那の陶器と想像せられる大きな六角の花瓶が、花一輪さしてないために、かえつてこの上もなく厳格にまた冷静に見えた。座敷中にはこの床の間の軸と花瓶の外は全く何一つ置いてないのである。額もなければ置物もない。おそるおそる四枚

立の襖ふすまの明放あけはなしてある次の間まを窺うかがうと、中央まんなかに机が一脚置いてあつたが、それさえいわば台のようなもので、一枚の板と四本の脚があるばかり、抽ひきだし出もなければ彫刻のかざりも何もない机で、その上には硯すずりもインキ壺も紙も筆も置いてはない。しかしその後うしろに立てた六枚屏風ろくまいびょうぶの裾すそからは、紐ひもで束ねた西洋の新聞か雑誌のようなものの片端かたはしが見えたので、私はそつと首を延して差さし覗ぞくと、いずれも大部のものと思われる種々なる洋書が座敷の壁際かべぎわに高く積重ねてあるらしい様子であつた。世間には往々読まざる書物をれいれいと殊ことさら更人の見る処かざりたに飾かざり立てて置く人さえあるのに、これはまた何という一風変つた癩癖かんぺきであろう。私は『柵草紙しがらみぞうし』以来の先生の文学とその性行について、何とは

なく沈<sup>ちんちよう</sup>重<sup>じゆう</sup>に考え始めようとした。あたかもその時である。一<sup>ひ</sup>際<sup>ときわ</sup>高<sup>た</sup>く漂<sup>ただよ</sup>い来<sup>き</sup>る木<sup>もく</sup>犀<sup>せい</sup>の匂<sup>にお</sup>と共に、上野の鐘<sup>しょうせい</sup>声<sup>せい</sup>は残暑を払う涼しい夕風に吹き送られ、明放した観潮楼上に唯一人、主人を待つ間<sup>ま</sup>の私を驚かしたのである。

私は振返つて音のする方を眺めた。千駄<sup>せんだぎ</sup>木の崖<sup>がけうえ</sup>上から見る彼<sup>か</sup>の広漠たる市中の眺望は、今しも蒼然たる暮靄<sup>ぼあい</sup>に包まれ一面に煙り渡つた底から、数知れぬ燈火<sup>とうか</sup>を輝<sup>かが</sup>し、雲の如き上野谷中の森の上には淡い黄<sup>たそがれ</sup>昏<sup>くれ</sup>の微光をば夢のように残していた。私はシャワンの描<sup>えが</sup>いた聖女ジエネヴィエーブが静に巴里<sup>パリ</sup>の夜景を見下<sup>みおろ</sup>している、かのパンテオンの壁画の神秘なる灰色の色彩を思出さねばならなかつた。

鐘の音は長い余韻の後を追掛け追掛け撞き出されるのである。その度たびごとにその響の湧わきいづ出る森の影は暗くなり低い市中の燈火は次第に光を増して来ると車馬の声は嵐のようにかえつて高く、やがて鐘の音の最後の余韻を消してしまった。私は茫然として再びがらんとして何物も置いてない觀潮樓の内部を見廻した。そして、この何物もない楼上から、この市中の燈火を見下し、この鐘声とこの車馬の響をかわるがわるに聴きき澄すましながら、わが鷗外先生は静に書を読みまた筆を執られるのかと思うと、実にこの時ほど私は先生の風貌をば、シヤワンが壁画中の人物同様神秘に感じた事はなかった。

ところが、「ヤア大変お待たせした。失敬失敬。」といつて、

先生は書生のように二階の梯子段を上つて来られたのである。

金巾かなきんの白い襯衣シヤツ一枚、その下には赤い筋のはいつた軍服のツボンを穿はいておられたので、何の事はない、鷗外先生は日曜貸間の二階か何かでごろごろしている兵隊さんのように見えた。

「暑い時はこれに限る。一番涼しい。」といいながら先生は女中の持運ぶ銀の皿を私の方に押出して葉巻をすすめられた。先生は陸軍省の医務局長室で私に対談せられる時にもきまつて葉巻を勧められる。もし先生の生涯いせきに些かたりとも贅沢らしい事があるとするならば、それはこの葉巻だけであろう。

この夕ゆう、私は親しくオイケンの哲学に關する先生の感想を伺うかつて、夜よも九時過再び千駄木の崖道をば根津権現ねづこんげんの方へ下り、不しのば

忍ずのいけ池うしろの後を廻ると、ここにも聳そびえ立つ東照宮とうしょうぐうの裏手一面の崖に、木この間まの星を数えながらやがてひろこうじ広小路の電車に乗った。

私の生れた小石川こいしかわには崖が沢山あった。第一に思出すのは茗みようがだにこみち荷谷の小径から仰ぎ見る左右の崖で、一方にはその名さえ気味の悪い切支丹坂きりしたんざかが斜ななめに開けそれと向い合つては名前を忘れてしまったが山道のような細い坂がこびなただいまち小日向台町の裏へと攀よじ登のぼっている。今はこの左右の崖も大方は趣のない積み方をした当世風の石垣となり、竹藪も樹木も伐きり払はらわれて、全く以前の薄暗い物凄さを失ってしまった。

まだ私が七、八ツの頃かと記憶している。切支丹坂に添う崖の



中腹ちゆうぶに、大雨たいうか何かのために突然真四角まつしかくな大きな横穴が現われ、何処どこまで深くつづいているのか行先が分らぬというので、近所のものは大方切支丹屋敷のあつた頃掘抜いた地中の抜道ではないかなぞと評判した。

この茗荷谷を小日向水道すいどうちよう町まちの方へ出ると、今も往来の真中に銀杏いちしようの大木が立っていて、草鞋わらじと炮烙ほうろくが沢山奉納してある。小さなお宮がある。一体この水道端すいどうばたの通は片側に寺が幾軒となくつづいて、種々いろいろの形をした棟門むねもんを並べている処から、今も折々私の喜んで散歩する処である。この通を行尽すと音羽おとわへ曲ろうとする角に大塚火薬庫のある高い崖が聳え、その頂いただきにちらばらと喬木きようぼくが立っている。崖の草枯れ黄みきば、この喬木の冬枯ふゆがれした

梢こずえに鳥が群むれをなして棲とまる時などは、宛然さながら文人画を見る趣がある。

これと対して牛込うしごめの方を眺めると赤城あかぎの高地があり、正面の行

手には目白の山の側面がまた崖をなしている。目白の眺望は既に

蜀山しよくさんじん人の東豊山とうほうざん十五景の狂歌にもある通り昔からの名所で

ある。蜀山人の記に曰く

東豊山新長谷寺しんちようこくじ 目白不動尊めじろふどうそんのたゞせ玉へる山は宝永の

頃再昌院さいしょういんほういん法印ほういんのすめる関口せきぐちの疏儀そぎしやう莊じやうよりちかけれ

ば西南せいなんにかたぶく日影ひかげに杖つえをたてゝ時ときしらぬ富士ふじの白雪しらゆき

をながめ千町せんちやうの田面たのものみどりになびく風に涼すずみてしばら

くいきをのぶとぞ聞えし又物部ものべの翁おきなの牛込うしごめにいませし頃

にやありけん南郭なんかく春台しゆんだい蘭亭らんていをはじめとしてこのほと

りの十五景をわかちてからうたに物せしいっかん一卷をもみたりし  
 事あればわが生れたる牛込の里ちかきあたりのけしきもなつ  
 かしくこゝにその題をうつして夷歌いかによみつゞけぬるもその  
 かみ大黒屋だいこくやときこえし高たかどには母の六十の賀むしろの莛をひら  
 きし事ありしも又天明てんめいのむかしなればせき口ぐちの紙すきの漉かへ  
 し目白の滝のいとのくりことになんありける

鶉山桜花

昔むくらみし田鼠むぐらうづらの山けぎくら化してののち後は花もちらほら

城門緑樹

しやちほちうおの魚木うしごめにのぼる青葉山もんわたりやぐらの牛込の門

溪辺流螢

何がしの大あたまにも似たるかなかまくら道みちに出戸でとの螢ほたるは

稔田落月

しら露のむすべる霜のをくてよりわせ田だにはやく落おつる月影

平田香稻

平たいらかな水田みづたもことし代よがよくてふねのほにほがさくかとぞ

みる

寺前紅楓

てらまへて酒のませんともみぢ見みの地口じぐちまじりの顔ゆうの夕ゆうば

へ

月中望嶽

八葉はちようの芙蓉ふようの花を一りんのかつらの枝えだにさかせてぞみる

## 江村飛雪

酒かひにゆきの中里なかざとひとすぢにおもひ入江いりえの江戸川えどがわの末すえ

## 長谷梵宇

明王みょうおうのふるきをもつてあたらしきにゐはせ寺でらの法師ほうした

るべし

## 赤城霞色

朝夕あさゆうのかすみあかぎのいろも赤城あかぎやまそなたのかたにむかでし

らるゝ

## 高田叢祠

みあかしの高田たかたのかたにひかりまち穴八幡あなはちまんか水みずいなりか

も

済松鐘磬

済松寺祖心の尼の若かりしむかしつけたるかねのこえごえ声々

田間一路

横にゆく蟹川かにがわこえて真直まっすぐに通る門田かどたの中なかぜきの道

巖畔酒壚

杉のはのたてる門辺かどべに目白おし羽觴うしやうを飛とばす岸の上への茶ちやや

堰口水碓

水車みずぐるまくるくめぐりあふことは人目つゝみのせき口ぐちも

なし

去年いわやしろくの暮巖谷四六君小波先生令弟はかと図はからず木曜会忘年会の席上  
 に邂逅かいこうした時談話はたまたまわが『日和下駄ひよりげた』の事に及んだ。

四六君はこうじまち麴町ひらかわちよう平川町ながたちようから永田町の裏通へと上る処のほに以前は実にゆうすい幽邃な崖があつたと話された。小波先生さざなみも四六君もともども共々その頃は永田町なる故一六先生いちろうくの邸宅にまだ部屋住へやずみの身であつたのだ。丁度その時分私も一時父の住まつた官舎がこの近くにあつたので、憲法発布当時の淋しい麴町の昔をいろいろと追想する事ができる。一年ほど父の住すまつておられた某省の官宅もその庭先がやはり急な崖になつていて、物凄**い**ばかりの竹藪たけやぶであつた。この竹藪にはひきがえる蟾蜍のいた事これまた気味悪いほどで、夏の夕ゆうべまだ夜にならない中から、何十匹となく這はい出して来る蟾蜍に庭先は一面大おおきな転ごろたいし太石でも敷詰めたような有様になる。この庭先の崖と相對しては、一筋の細い裏通を隔ドイッてて独逸公使館の

立っている高台の背後うしろがやはり樹木の茂った崖がきになっていた。私は寒い冬の夜よなぞ、日本伝来の迷信に養われた子供心に、われにもあらず幽霊や何かの事を考え出して一生懸命やせがまんに瘦我慢やせがまんしつつまつくら真暗な廊下を独りかわへ行く時、その破れた窓の障子から向むの崖がきなる木立こだちの奥深く、巍然ぎぜんたる西洋館の窓々に燈火の煌々こうこうと輝くのを見、同時にピアノの音ねの漏もるるを聞きつけて、私は西洋人の生活をば限りもなく不思議に思ったことがあつた。

近頃日和下駄を曳摺ひきずつて散歩うちする中、私の目についた崖は芝しば二本ほんえのき榎えのきなる高野山こうやさんの裏手または伊皿子台いさらごだいから海を見るあたり一帯の崖である。二本榎高野山の向む側がわなる上行寺じょうぎようじは、



其角きかくの墓ある故に人の知る処である。私は本堂の立っている崖の上から摺鉢すりばちの底のようなこの上行寺の墓地全体を覗のぞき見る有様をば、其角の墓諸もろとも共に忘れがたく思っている。白しろかね金の古刹瑞こさつず聖寺いしやうじの裏手も私には幾度か杖を曳いくに足るべき頗すこぶる幽邃ゆうすいなる崖をなしている。

麻布赤坂あざぶあかさかにも芝同様崖が沢山ある。山の手に生れて山の手に育った私は、常にかの軽快瀟しやうしや洒しやなる船と橋と河岸かしの眺ながめを専有する下町したまちを羨むの余り、この崖と坂との倍きつくつ倨こなる風景を以て、大おおに山の手の誇とするのである。『隅田川兩岸一覽』に川筋の風景をのみ描き出した北斎ほくさいも、更に足曳あしびきの山の手のために、

『山復山』三巻を描いたではないか。



## 第十 坂

前回記する処の崖といささか重ちようふく複する嫌があるが、市しちゆ中の坂について少しく述べたい。坂は即ち平地へいちに生じた波瀾である。平坦なる大おおどおり通は歩いて滑らず躓つまずかず、車を走らせて安全無事、荷物を運ばせて賃銀安しといえども、無聊ぶりように苦しむ閑か人んじんの散歩には余りに単調すぎに過る。けだし東京市中における眺望の一直線をなす美観は、橋あり舟ある運河の岸においてのみこれを看み得うるが、銀座日本橋の大通の如き平坦なる街路の眺望に至つては、われら不幸にしていまだ泰たいせい西の都市において経験したよ

うな感興を催さない。西洋の都市においても私は紐育ニューヨークの平坦

なる Fifth Avenue よりコロンビヤの高台に上る石級せききゆうを好み、

パリパリザールヴァールザールヴァールはるか  
 巴里の大通よりも遙にモンマルトルの高台を愛した。里昂リオンにあつ

てはクロワルツスの坂道から、手摺てずれた古い石の欄干を越えて眼

下にソオンの河岸通かしどおりを見下みおろしながら歩いた夏の黄昏たそがれをば今だ

に忘れ得ない。あの景色を思浮べる度々、私は仏蘭西フランスの都会は何

処へ行つてもどうしてあのように美しいのであろう。どうしてあ

のように軟く人の空想を刺※するように出来ているのであろうと、

相も変らず遣瀨やるせなき追憶の夢にのみ打沈められるのである。

その頃私は年なお三十に至らず、孤身ひようぜん飄然ひょうぜん、異郷にあつて

更に孤客となるの怨うらみなく、到る処の青山せいざんこれ墳墓ふんぼ地ともいいいた

いほど意氣すこぶる頗豪なるところがあつたが今その十年の昔と、鬢びんぱつ髪はつ  
 いまだ幸さいわいにして霜を戴かざれど精魂漸く衰え聖代の世に男一匹の  
 身みを持ってあぐみ為す事もなき苦しさに、江戸絵図を懐ふところ中に日和ひよ  
りげたひきず下駄曳摺ずつて、既に狂歌俳句に読よみふる古ふるされた江戸名所の跡あとを弔とむらい  
 歩む感慨とを比較すれば、全くわれながら一滴の涙なきを得ない。  
 さりながら、かの端唄はうたの文句にも、色気ないとて苦にせまい賤しずが  
ふせや伏家に月もさす。徒いたずらに悲いきどおみ憤おつて身を破るが如きはけだし賢人の  
 なさざる処。われらが住む東京の都市いかに醜うちく汚よごしというとも、  
 ここに住みここに朝夕ちようせきを送るかぎり、醜うちき中にも幾分の美を搜り  
 汚よごき中にもまた何かの趣を見出し、以て気は心とやら、無理やり  
 にも少しは居心地住心地のよいようにみずか自ら思おもいなす処ところがなければ

ならぬ。これ元來が主意というものなき我が日和下駄の散歩の聊か以て主意とする処ではないか。

そもそも東京市はその面積と人口においては既に世界屈指の大都會である。この盛況は銀座日本橋の如き繁華の街路を歩むよりも山の手はるかの坂に立つて遥はるかに市中を眺望する時、誰が目にも容易たやすく感じ得らるる処である。この都に生れ育ちて四時の風物何一つ珍しい事もないまでに馴れ過ぎてしまつたわれらさえ、折あつて九段坂ざか、三田聖坂みたひじりざか、あるいは霞ヶ関かすみせきを昇降する時には覚えとどずその眺望の大なるに歩みを留めるではないか。東京市は坂の上の眺望によつて最もよくその偉大を示すというべきである。古來その眺望よりして最も名高きあかさかは赤坂あかさか靈南坂れいなんざ上かうえより芝西にしの久保くぼへ下

りる江戸見坂である。愛宕山あたごやまを前にして日本橋京橋から丸の内  
えどみやざか  
 を一ひとめ目に望む事が出来る。芝伊皿子台上いざらごだいうえの汐見坂しおみやざかも、天然の  
 地形と距離との宜よろしきがために品川の御台場おだいば依然として昔の名所  
 絵に見る通り道行く人の鼻先に浮べる有様、これに因よつてこれを  
 観みれば古来江戸名所に数えらるる地点ことごと悉く名ばかりの名所でない  
 事を証するに足りる。

今市中の坂にして眺望の佳かなるものを挙げんか。神田お茶の水  
しょうへいざか  
 の昌平坂しやうへいざかは駿河台するがだい岩崎邸門前いわさきていもんぜんの坂と同じく万世橋を  
 眼の下に神田川かんだがわを眺むるによろしく、皂角坂さいかちざか水道橋内駿河台  
 西方は牛込麴町の高台並びに富嶽ふかくを望ましめ、飯田町いいたまちの二合にごうは  
んざか  
 半坂そとぼりは外濠そとぼりを越え江戸川の流を隔てて小石川うしてんじん牛天神の森を

眺めさせる。丁度この見晴しと相對するものは則ち小石川伝通すなわ  
 院前いんの安藤坂あんどうざかで、それと並行する金剛寺坂こんごうじざか荒木坂あらかぎざか服部坂はつとりざか  
たいにちざか大日坂などは皆齊ひとしく小石川より牛込あかぎばんちようへん赤城番町辺を見渡す  
 すによい。しかしてこれらの坂の眺望にして最も絵画的なるは紺  
 色なす秋の夕靄ゆうもやの中より人家の灯ひのちらつく頃、または高台の  
 樹木の一齐に新緑よそに粧よそわるる初夏晴天の日である。もしそれ明月  
 皎々こうこうたる夜、牛込神楽坂うしごめかぐらざか浄瑠璃坂じようるりざか左内坂さないざかまた逢坂おうさかなぞ  
 のほとりに佇たたずんで御濠おほりの土手のつづく限り老松の婆娑ぼさたる影静な  
 る水に映ずるさまを眺めなば、誰しも東京中にかくの如き絶景あ  
 るかと驚かざるを得まい。

坂はかくの如く眺望によりて一段の趣を添うといえども、さり



とて全く眺望なきものも強<sup>あなが</sup>ち捨て去るには及ばない。心あつてこ  
 れを搜<sup>さぐ</sup>らんと欲すれば画趣詩情は到る処に見出し得られる。例え  
 ば四谷愛住町の暗闇坂、麻布二之橋向の日向坂の如き  
 を見よ。といった処でこれらの坂はその近所に住む人の外はちよ  
 つとその名さえ知らぬほどな極めて平々凡々たるものである。し  
 かし暗闇坂は車の上<sup>のぼ</sup>らぬほど急な曲つた坂でその片側は全長寺<sup>ぜんちやうじ</sup>  
 の墓地の樹木鬱蒼として日の光を遮<sup>さえぎ</sup>り、乱塔婆<sup>らんとうば</sup>に雑草生茂<sup>おいしげ</sup>る  
 有様何となく物凄い坂である。二の橋の日向坂はその麓を流れる  
 新堀川の濁水<sup>しんほりかわ</sup>とそれに架<sup>か</sup>つた小橋<sup>こばし</sup>と、斜<sup>ななめ</sup>に坂を蔽<sup>ひ</sup>う一株の榎<sup>ひとかゝのき</sup>  
 との配合<sup>おのずか</sup>が自ら絵になるように甚だ面白く出来ている。振袖火事<sup>ふりそでかじ</sup>  
 で有名な本郷本妙寺<sup>ほんごうほんみょうじ</sup>向側の坂もまたその麓を流るる下水と小

橋とのために私の記憶する処である。赤坂喰違より麴町清  
みずだに水谷へ下る急な坂、また上二番町辺樹木谷へ下る坂の如  
かみにばんちようへんじゆもくだにきは下弦の月鎌の如く樹頭に懸る冬の夜、広大なこの辺の屋敷  
よ屋敷の犬の遠吠え聞ゆる折なぞ市中とは思えぬほどのさびしきで  
ある。坂はまた土地の傾斜に添うて立つ家屋塀樹木等の見通しに  
よつて大に眼界を美ならしむる。則ち旧加州侯の練塀立ちつ  
おおいづく本郷の暗闇坂の如き、麻布長伝寺の練塀と赤門見ゆる一本  
松の坂の如きはその実例である。

私はまた坂の中で神田明神の裏手なる本郷の妻恋坂、湯  
うち島天神裏花園町の坂、また少しく辺鄙なるを厭わずば白  
しまてんじんうらはなぞのちよう金清正公のほとりの坂、さては牛込築土明神裏手の坂、  
ねせいしようこう

赤城あかぎ明神裏門より小石川かいたいまち改代町へ下りる急な坂の如く神社の裏  
 手にある坂をば何となく特徴あるように思い、通る度たびごとに物珍  
 らしくその辺へんを眺めるのである。坂になった土地の傾斜は境内けいだい  
 の鳥居や銀杏いちようの大木や拝殿の屋根、玉垣などをば、或時は人家  
 の屋根の上、或時は路地の突当りなぞ思いも掛けぬ物の間からい  
 ろいろに変化さして見せる。私はまたこういう静な坂の中途に小  
 じんまりした貸家を見付ると用もないのに必ず立止つては仔細しさいら  
 しく貼札はりふだを読む。何故なぜというに神社の境内に近く佗住居わびずまいして  
 読書に倦み苦作につかれた折窃そつと着のみ着のまま羽織はおりも引掛ひっかけず  
 我が家やの庭のように静な裏手から人なき境内に歩入あゆみいつて、鳩の  
 飛ぶのを眺めたり額堂がくどうの絵馬えまを見たりしたならば、何思うとも

なく唯茫然として、容易くこの堪えがたき時間を消費する事が出来はせまいかと考えるからである。

東京の坂の中にはまた坂と坂とが谷をなす窪地を間にして向

あわせ

合に突立っている処がある。前章市内の閑地を記したる条に述

べた鮫ヶ橋の如き、即ちその前後には寺町と須賀町の坂が向

合いになっている。また小石川茗荷谷にも両方の高地が坂にな

っている。小石川柳町には一方に本郷より下る坂あり、一方

には小石川より下る坂があつて、互に対峙している。こういう処

は地勢が切迫して坂と坂との差向いが急激に接近していれば、景

色はいよいよ面白く、市中に偶然温泉場の街が出来たのかと思

わせるような処さえある。

いちやたにまち　なかのちよう　のほ  
 市ヶ谷町から仲之町へ上る間道に古びた石段の坂がある。  
 ねんぶつざか　あざぶいくら  
 念仏坂という。麻布飯倉のほとりにも同じような石段の坂が  
 立っている。雁木坂と呼ぶ。これらの石級磴道はどうか  
 すると私には長崎の町を想い起すよすがともなり得るので、日和  
 下駄の歩みも危くコツコツと角の磨滅した石段を踏むごとに、ど  
 うか東京市の土木工事が通行の便利な普通の坂に地ならししてし  
 まわないようにと私は心窃ひそかに念じているのである。

## 第十一 夕陽 附富士眺望

東都の西郊めぐろ目黒ゆうひに夕日おかケ岡というがあり、大久保おおくほに西向にしむきてんじ天  
神んというがある。俱ともに夕日の美しきを見るがために人の知る所

となつた。これ元より江戸時代の事にして、今日わざわざかかる  
辺鄙へんぴの岡に杖とどを留めて夕陽ゆうひを見るが如き愚をなすものはあるまい。  
しかし私は日頃しきり頻しきりに東京の風景をさぐり歩くに当つて、この都会  
の美観と夕陽せきようとの関係甚だ浅からざる事を知つた。

立派な二重橋の眺望も城壁の上なる松の木立こたちを越えて、西の空  
一帯に夕日の燃立もえたつ時最も偉大なる壯観を呈する。暗緑色の松と、

晩霞ばんかの濃い紫と、この夕日の空の紅こうしよく色とは独り東京のみならず日本の風土特有の色彩である。

夕焼ゆうやけの空は堀割に臨む白い土蔵どぞうの壁に反射し、あるいは夕風

を孕はらんで進む荷船にぶねの帆を染めて、ここにもまた意外なる美観をつ

くる。けれども夕日と東京の美的関係を論ぜんには、四谷よつや麴こうじま

町ち青山あおやま白金しろかねの大おお通どおりの如く、西向きになつて一本筋

の長い街路について見るのが一番便宜である。神田川かんだがわや八丁はっちよ

堀うぼりなぞいう川筋、また隅田川すみだがわ沿岸の如きは夕陽せきようの美を俟また

ざるも、それぞれ他の趣味によつて、それ相応の特徴を附する事

が出来る。これに反して麴町こうじから四谷を過ぎて新宿に及ぶ大通、

芝白金から目黒行人坂めぐろぎやうにんざかに至る街路の如きは、以前からいやに

駄ただつびろ々々広いばかりで、何一ツ人の目を惹ひくに足るべきものもなく全  
 く場末ばすえの汚い往来に過ぎない。雪にも月にも何の風情ふせいを増しはせ  
 ぬ。風が吹けば砂すなけむり 烟けむり に行手は見えず、雨が降れば泥でいねい 濘きびす 人の踵  
 を没せんばかりとなる。かかる無味殺風景の山の手の大通をば幾  
 分たりとも美しいとか何とか思わせるのは、全く夕陽ゆうひの關係ある  
 がためのみである。

これらの大通は四谷青山白金巢鴨すがもなぞと処は変れど、街の様子  
 は何となく似通にかよつている。昔四谷通は新宿より甲こうしゆう 州しゅう 街道また  
 青梅街道おうめとなり、青山は大山おおやま 山街道、巢鴨は板橋を経て中仙道なかせんどう  
 につづく事江戸絵図を見るまでもなく人の知る所である。それが  
 ためか、電車開通して街路の面目一新したにかかわらず、今以て



何処どことなく駅路の臭味しゅうみが去りやらぬような心持がする。殊に広  
 い一本道のはずれに淋しい冬の落日を望み、西北にしきたの寒風かんふうに吹  
 付けられながら歩いて行くと、何ともなく遠い行先の急がれるよ  
 うな心持がして、電車自転車ねの音をば駅路の鈴に見立てた  
 くなるのも満まんざい更無理ではあるまい。

東京における夕陽せきようの美は若葉の五、六月と、晩秋の十月十一  
 月の間を以て第一とする。山の手は庭に垣根に到る処しんじゆ新樹の緑  
 滴したたらんとするその木立こだちの間より夕陽の空紅くれないに染出そめいだされたる美し  
 さは、下町の河添かわぞいには見られぬ景色である。山の手なかのその中で  
 も殊に木立深く鬱蒼とした処おのずかといえ、自ら神社仏閣の境内を択  
 ばなければならぬ。雑司ぞうしヶ谷やの鬼子母神きしもじん、高田たかたの馬場まばの雑木林ぞうきばやし、

目黒の不動、角つのはず笥じゆうにそうの十一社なぞ、かかる処は空を蔽う若葉の間より夕陽を見るによいと同時に、また晩秋の黄葉こうようを賞するに適している。夕陽影裏落葉を踏んで歩めば、江湖淪落ごうこうりんらくの詩人ならざるもまた多少の感慨なきを得まい。

ここに夕陽せきようの美と共に合せて語るべきは、市中より見る富士山の遠景である。夕日に対する西向きの街からは大抵富士山のみならずその麓つらなに連る箱根大はこね山秩父おおやまちちぶの山脈までを望み得る。青山一帯の街は今なお最もよくこの眺望に適した処で、その他九段くだんざ坂上かうえの富士見町通、神田駿河台、牛込寺町辺うしごめてらまちへんも同様である。

関西の都会からは見たくも富士は見えない。ここにおいて江戸えど

児つこは水道の水と合せて富士の眺望を東都の誇ほこりとなした。西に富士  
 ケ根東に筑波つくばの一語は誠によく武蔵野の風景をいい尽したもので  
 ある。文政年間葛飾かつしかほくさい北齋『富嶽三十六景』の錦にしきえ絵を描くや、  
 その中江戸うち市中より富士を望み得る処の景けい色凡そ十数個所を  
 扱いんだ。曰く佃島つくだじま、深川万年橋ふかがわまんねんばし、本所ほんじよ豎川、同じく  
 本所五ツ目羅漢寺めらかんじ、千住せんじゆ、目黒、青山あおやまり竜巖寺りゆうがんじ、青山おんでん穩田  
すいしや水車かんだ、神田駿河台にほんばし、日本橋にほんばし橋上きょうじょう、駿河町するがち越後屋えちごや店  
う頭あさくさ、浅草本願寺ほんがんじ、品川御殿山しながわごてんやま、及び小石川の雪せつちゆう中であ  
 る。私はまだこれらの錦絵をば一々实景に照し合した事はない。  
 それ故例えば深川万年橋あるいは本所豎川辺より江戸時代におい  
 ても果して富士を望み得たか否かを知る事が出来ない。しかし北

齋及びその門人昇亭しょうてい北寿ほくじゆまた一立齋いちりゅうさい広重ひろしげらの古版画は  
 今日なお東京と富士山との絵画的關係を尋ぬるものに取つては絶  
 好の案内たるやいうを俟またない。北寿が和蘭陀風オランダふうの遠近法を用い  
 て描いたお茶の水の錦絵はわれら今日目のあたり見る景色と変り  
 はない。神田聖堂かんだせいどうの門前を過ぎてお茶の水に臨む往来の最も高  
 き処たたずに佇んで西かたの方を望めば、左には対岸の土手を越して九段の  
 高台、右には造兵廠ぞうへいしやうの樹木と並んで牛込市ケ谷辺うしごめいちやへんの木立を  
 見る。その間を流れる神田川は水道橋より牛込揚場あげばへん辺の河岸かしま  
 で、遠いその眺望のはずれに、われらは常に富嶽とその麓の連山  
 を見る光景、全く名所絵と異なる所がない。しかして富嶽の眺望の  
 最も美しきはやはり浮世絵の色彩に似て、初夏晩秋の夕陽せきように照

されて雲と霞は五色ごしきに輝き山は紫に空は紅くれないに染め尽される折である。

とうせいじん  
 当世人の趣味は大抵日比谷公園の老樹に電気燈を点じて奇麗  
 奇麗と叫ぶ類たぐいのもので、清夜せいやに月光を賞し、春しゅんぶう 風ふうに梅花を愛  
 するが如く、風土固有の自然美を敬愛する風雅の習慣今は全く地  
 を払ってしまった。されば東京の都市に夕日が射さそうが射すまい  
 が、富士の山が見えようが見えまいがそんな事に頓着するものは  
 一人もない。もしわれらの如き文学者にしてかくの如き事を口に  
 せば文壇は挙こぞつて気障きざな宗そうしやう 匠じやうか何ぞのようてひどに手厳ひんせきく擯ひんせき斥しやくす  
 るにちがいない。しかしつらつら思えば伊太利亞イタリヤミラノの都はア  
 ルプの山影さんえいあつて更に美しく、ナポリの都はヴェズウブ火山の

烟けむりあるがために一ひとときわ際旅するものの心に記憶されるのではないか。  
 東京の東京らしきは富士を望み得る所にある。われらは徒いたずらに議員  
 選挙に奔走する事を以てのみ国民の義務とは思わない。われらの  
 意味する愛国主義は、郷土の美を永遠に保護し、国語の純化洗練  
 に力つとむる事を以て第一の義務なりと考うるのである。今や東京市  
 の風景全く破壊せられんとしつつあるの時、われらは世人のこの  
 首都と富嶽との關係を輕視せざらん事を希こいねごうて止やまない。安永頃  
 の俳書『名所方角集』に富士眺望と題して

名月や富士見ゆるかと駿河町

素竜

半分は江戸のものなり不尽ふじの雪

立志りゆうし

富士を見て忘れんとしたり大晦日おおみそか

宝馬

十余年前ぜんちうくてんきよ樂天居さざなみさんじん小波山人もとの許に集まるわれら木曜会の会  
 員に羅臥雲らがうんと呼ぶ眉目秀麗なる清客しんきやくがあつた。日本語を善くよ  
 する事邦人に異らず、蘇山人そさんじんと戲号して俳句を吟じ小説をつづ  
 りては常にわれらを後にしりえ 瞠どうじやく 若たらしめた才人である。故山にこざん  
 還る時かえ 一句を残して曰く

行春ゆくはるの富士も拝まんわかれかな

蘇山人湖南の官衙かんがにあること歳余病を得て再び日本に來遊し幾い  
 何もなくして赤坂あかさか一ツ木の寓居に歿した。わたしは富士の眺くぼく  
 望よりしてたまたま蘇山人が留別の一句を想い惆悵ちゆうちようとしてそ  
 の人を憶うて止まおもない。

君は今鶴にや乗らん富士の雪

荷風

大正四年四月



## 青空文庫情報

底本：「荷風隨筆集（上）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年9月16日第1刷発行

2006（平成18）年11月6日第27刷発行

底本の親本：「荷風隨筆 二」岩波書店

1981（昭和56）年12月17日第1刷発行

※誤植を疑った箇所を、底本の親本の表記にそって、あらためました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※「屋敷」と「屋舗」の混在は、底本通りです。

※表題は底本では、「日和下駄《ひよりげた》 一名 東京散策記」となっています。

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2009年12月3日作成

2019年12月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

# 日和下駄

一名 東京散策記

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫  
著者 永井荷風  
URL <http://www.aozora.gr.jp/>  
E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)  
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU  
URL <http://aozora.xisang.top/>  
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

### Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>